
銀河を巡る遥かのプラネテス

A r c

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河を巡る遙かのプラネテス

【Nコード】

N0253W

【作者名】

Arc

【あらすじ】

～あらすじ～

太陽系連合防衛軍所属超弩級戦艦『ファイネリオン』。

母なる星を飛び立ち宇宙を駆け巡る、全長一〇〇〇〇メートルを超える巨大な箱舟に、一人の少年が居た。

少年の夢は銀河を縦横無尽に飛び回る戦闘機『ゲイルローダー』のパイロットとなる事。

軍学校を卒業し晴れて夢を叶えた少年を待っていたのは、ファイネ

リオン内部で起こる奇妙な事件の数々。

同じ部屋で暮らす同僚はブラックジョークが大好きな親友で!?

上司である艦長は威厳のかけらも感じられないミニマム少年で!?

二人一組でチームを組むことになったのはエースパイロットの美少女で!?

そして少年を待っていたのは、今まで見ていた夢とはかけ離れた本物の宇宙。本物の戦場。

そんな中、彼は命を懸けて戦う事、命を懸けて守る事の意味を知る。やがて明らかになる敵『デイスエグスタ』の存在と、余りにも苛烈なこの宇宙の運命。

その運命に翻弄されながらも戦う、巨大ロボット『プラネテス』を駆る戦士達。

宇宙を舞台に繰り広げられる、SFスペースオペラ……に、なるのでしょうか? (謎)

第13回えんため大賞様に『夢剣誠心』として投稿した小説です。

拙作ですが、少しでも皆様を楽しませられるなら幸いです。

ご意見ご感想お待ちしております。

これからの執筆活動の大きな原動力とさせて下さい。

くプロローグく

くプロローグく

無数の星々が瞬く大銀河。人類が未だ見ぬ理想郷を求めて宇宙を駆ける時代。今からそう遠くない、遙か彼方の時空の物語。

人々は今や宇宙という存在の殆どを理解するまでに進化、或いは増長、していた。

その昔、太陽に近付き過ぎた英雄は地に堕ちた。天を目指して建造された塔は雷撃に散った。

過ぎたる者はすべからく排除される。それが創造主の定めた宿命だというのか。

しかし彼は、まだこの世界を知るには幼く小さな存在だった。彼にとって、疑問符とは星の数と等価であるのだ。

「周りには『デイスエグスタ』だらけ。それでも、あなたはやっぱりやるのよね？」

——『デイスエグスタ』とは？

「ああ、その通りだ。まだ何も終わっていない。ここには俺達と、『プラネテス』が居る——！」

——『プラネテス』とは？

「見てろ！俺の『超重力』は、こんなもんじゃねええええつつつ！——！」

そして、『超重力』とは——？

これは、想いと想いが互いに惹かれ合う物語。

第一章　俺が地球を守るんだ！

第一章　俺が地球を守るんだ！

1

拝啓、地球に居る父さんと母さんへ。

久しぶり……に、なるのかな。ジュンハクだけど。

このメッセージが届くには、地球が太陽の周りをあと十回も百回も回らなきゃいけないから、正直これは無駄かもしれないけど。

でも、やっぱりこういうのはちゃんとしておきたかったんだ。

父さんと母さんは言ったよね。人間の想いつてやつは何処に居たって届くんだ、って。

だから俺は、きっと届く、って思いながら、今この文章を書いてる。ちゃんと届く、よね。

グリニッジ標準時刻ではもう過ぎ去った時間の事なんだろうけど、ついに明日、俺は軍人になるんだよ。軍学校、卒業したんだ。

そう。ようやく俺の夢が叶ったんだ。俺、父さんや母さんが暮らす地球を守る為に戦う事が出来るようになったんだよ。

それもこれも全部、俺を育ててくれた二人のお陰。

俺は今地球から遠く遠く離れた場所に居るからお祝いは受け取れないけど、せめてこの感謝の気持ちだけは伝えたいんだ。

ありがとう。

その代わりって言うたらんだけど、俺、絶対地球を守ってみせるよ。

父さんと母さんは、地球で平和に暮らしてね。それじゃ。敬具

「……ふうっ。こんなもんかな」

四角く区切られた金属の部屋の中に響く、カタカタというタイピ

ング音。少年が手を止めると、その音も聞こえなくなった。

文章を二度三度見返してから、送信ボタンを押す。宛て先は両親。所在地は地球。彼からすれば、それは遙か彼方の星の名前だった。

少年の名は『ジュンハク・アストロハーツ』。十五歳の少年にして、明日から軍属の身になる事が決まる軍学校生。

所属は太陽系連合防衛軍。最高峰の力と名誉を掲げる太陽系唯一無二の軍隊だ。

その軍に所属する太陽系防衛用超弩級戦艦『ファイネリオン』。

彼は今その巨大戦艦に比べれば余りにも小さな居住ブロックの、更に小さな学園の、更に小さな学生寮の一室に居る。

キッチンとバスルームが一つにパソコン机が一つ納まる程度の部屋が一つという標準的なワンルームの部屋だ。

ちなみに内装はごく普通の和室である。これはジュンハクの趣味だ。

「太陽系連合防衛軍所属、ジュンハク・アストロハーツであります！……なんてな」

彼は鏡に映った自分を見て、姿勢を正して敬礼を行ってみた。

太陽系連合防衛軍。彼は幼い頃からこの存在に憧れていた。大きくなったら自分も地球を守るんだ、と。

テレビや漫画で見たヒーローの影響もあったかもしれない。

しかしそれ以上に彼、ジュンハクには溢れ出んばかりの使命感に満ち満ちていた。正義感、と言い換えても差し支えないだろう。

彼はその持ち前の正義感と軍学校での成績を評価され、たった今その軍学校を卒業する事を許された。

あと数時間もすれば離れる事になる寮の自室に感慨を覚えながら、彼は両親にその旨をメールで報告した。

彼のメールにあった通り、そのメールが直接両親の元に届く事は無い。

何故なら彼は地球からも太陽系からも遠く離れた外宇宙に居るからである。

辺りには大小様々な天体が存在するが、誰もその星々の名前を知らない。

というよりは、正式な名称が存在しないのだ。

何故ならジュンハクの今居るこの空間は、人類が未だ観測した事の無い程遠く離れた宇宙であるからだ。

そこにある恒星も、それを内包する銀河系ですらも、広大で巨大な宇宙にしてみれば針の穴より小さなものなのだ。

地球の夜空を見上げてみても、彼らの居る場所は誰にも見えないだろう。それ程の深遠に、彼、ジュンハクは居る。

「さ、つてと。一応、寮母のおばさん達にも挨拶すつか」

荷物の整理や掃除を後回しにして、彼はいったん自室を後にする。

「長らくお世話になったこの学園も、今日でお別れか」

そんな事を呟きながら、ジュンハクは軍学校の『外』に出る。

天井には青い空と白い雲。スクリーンに映った虚像であると知っていたても、その光景は眩しく見えた。

これが宇宙を航行する戦艦の内部である事を忘れる程、人工の空は清々しく見えている。

「そっぴや、ブラウの奴はどうしてんのかな……」

ぽつりと呟くジュンハク。

家財道具の運搬を専門の業者に任せてから、彼は自分が今まで所属していた学園の正門に立った。

長い年月が過ぎたにも拘らず二十一世紀の建造物と大して変わらない面構えで、ジュンハクを見送っている。

懐かしさはあまり感じない。それよりも、あともう少しで太陽系連合防衛軍に配属される事の方が待ち遠しい。

だからジュンハクは早々に正門に背を向け、一般市民用の居住ブロックから軍司令部を目指して歩き始めた。

「……？」

その途中、ジュンハクは背中の中の辺りに視線のようなものを感じた。

すぐに振り返るが、そこには何も居ない。気の所為か、と適当に結論付けて、彼は軍部へと向かった。

「うふふ。そう、そうなの。貴方も私達と同じ『重力子』なのね」
学園の時計塔に、一人の少女が立っている事にも気が付かず。

第一章 2

2

「おお……これが防衛軍のユニフォームか！」

定刻通りに軍司令部へと到着したジュンハクは網膜、声紋や体内のナノマシン等の厳重なチェックを受けた。

それが終わってから上司となる士官からの命でジュンハクはロッツカールームに移動、軍服に袖を通した。

のりが良く利いた新品の軍服は着るだけで気持ちが引き締まる筈、なのだが。

「言っておくが。正式な配属はまだとはいえ、その服を身に着けたこの瞬間からお前はこの軍を動かす一つの歯車となるのだ。いつまでも学生気分ではいかんぞ」

「っ！は、失礼致しました！」

自分の夢が一つ叶った事で浮かれていたのだろう、ジュンハクは自分が軍人になるのだという事を失念していた。

すぐに姿勢を正して、がちがちに緊張した声色で上官に返礼する。うむ、と頷くと上官はロッツカールームのドアへ向かう。

「正式に配属される前に、我らが司令官である艦長に挨拶をする事だ。軍服に着替えて貰ったのはその為でもある。

あと数分で呼び出しが掛かる。呼ばれたらすぐ艦長室に出頭するよ
うに」

いったん振り返った後、上官はジュンハクに次の指示を出した。
部屋を出て行く上官を敬礼で見送るジュンハク。

上官の気配を完全と感じなくなってから、ジュンハクは敬礼の為
の手を下ろし、盛大なガッツポーズを取った。

「やった、やったぞ！これで俺も……くーーーーっ！」

軍学校で軍人のなんたるかを学んでいたとはいえ、彼はまだ十五歳の少年。嬉しい事があれば飛び跳ねたくなるのも無理は無い。

一通り喜びを噛み締めた後、ジュンハクは自分の携帯電話にメールが届いた事に気が付いた。

携帯電話は大昔から変わらない姿を保持しているが、これは長い歴史の中で何度も何度もモデルチェンジを繰り返した後の姿だ。

薄い板状のディスプレイだけのものも過去には存在したが、ジュンハクは今でもオープン式の携帯電話を所持している。

デザインの先祖帰りというのだろうか。

最も見た目が同じでも、性能は遙か彼方まで進化しているのは当然の事ではあるが。

ともあれ、ジュンハクは先程届いたメールを開いてみる。

そこには、地図のデータが添付されていた。

彼が暮らす『家』でもあり太陽系を守る為の『艦』でもあるファイネリオン。その巨大戦艦の艦長室への道のりが描かれている。

「よーっし！まずは艦長に挨拶だ！」

ジュンハクは指し示されたポイントを目指してロッカールームから出る。と、その瞬間だった。

「うわっ」

「おっと」

ぼす、という柔らかな衝突音。人間とぶつかった、と認識した直後にはジュンハクは顔を真っ青にしてその場から飛びのいた。

「しっ、ししし失礼致しました！！あ、ああその人が居るなんて俺いや自分全く予想していませんでしたので……っ！！」

大量の台詞を思いつく限り全部いっぺんに早口でまくしたてて謝罪の意を表明するジュンハク。

「ははは。君は面白い子だねえ」

すると、ぶつかってしまった相手は声を上げて笑い始めた。何事かと思い、顔を上げて相手の顔色を窺うジュンハク。

そこには、特にどうという事は無い、という表情の、すらりと伸

びた手足が特徴的な少年が居た。

少年、といってもジュンハクより三つか四つは年上に見えるが。

「そんなにかしこまる事は無いよ。君の階級は知らないが、なあに、階級なんてあつて無いようなものさ」

少年は可笑しな事を言う。厳しい上下関係によつて成り立っている筈の軍隊において、階級があつて無いようなもの？

「は？そ、それは一体どういう事でありましょうか？」

「直に分かるよ。このファイネリオンがどいつた仕組みで動いているのか、ね」

頭の上に疑問符を浮かべるジュンハクであるが、その疑問が解消される事は無い。

呆氣にとられる彼をさておいて、彼の目の前に立つ少年はこんな提案をする。

「その様子だと、新入りみたいだね。新入りは皆、初めに艦長に挨拶をするんだってという事は知ってるよね？」

だったら僕が艦長室まで案内してあげよう。どうせまだ右も左も分からないだろうからね」

「え？あ、いや！自分なら大丈夫であります、お手をわずらわせる訳には……っ！」

「気にする必要は無いよ。どうせ皆暇してる所だから」

軍人が戦艦の中で暇している、という状況がジュンハクには想像がつかなかった。

軍学校で教えられたのは軍人というものが一体どれだけ過酷な役目を担っているのかという事であつた。

当然非番の時は非番なのだろうが、全員とはいかないまでも皆が暇している、というのは一体如何した事だろうか。

「紹介が遅れたね。僕はグリューネ。『グリューネ＝リヒト』だ」

おもむろに、背の高い少年は自己紹介を始めた。ジュンハクは慌てて自己紹介で返そうとするが、そこで違和感に気付く。

「あ、明日付けで配属となります、ジュンハク」アストロハーツで

あり、……え？『リヒト』！？」

「おや。僕の名前を知っているのかな？」

「ジョンハクはその違和感をそのままぶつけてみる事にした。グリユーネは意外そうな声で返す。

「お、……じ、自分は軍学校時代にその名前を聞いた事がありました」

「ああ、成る程！君は『ブラウ』の友達か！」

と、グリユーネは人差し指を天井に向けた。何か意味があるのだろうか。グリユーネは話を進める。

「そうかそうか。ブラウの友達だというのなら、それは僕の友達だといっても良いだろうね。よろしく頼むよ、ジョンハク君」

「え、……あ、はい！よろしく願います！」

す、とグリユーネはジョンハクに向かって右手を差し出した。握手を求めているのだろう。ジョンハクはそれに応じる。

「うん。これで君と僕とは友達同士だ。これからはそのつもりで接してくれ」

「は、承知致しました！……あ」

がちがちの台詞に、グリユーネはまた声を上げて笑い始めた。

「やっぱり君は面白いねえ。おっと。そういえば艦長から呼び出しを受けているんだったね。時間をとらせてすまない」

「あ、いえ自分は」

「気にしない気にしない。さあ、行こうか。艦長室はこっちだよ」

ジョンハクは大人しくグリユーネに従う事にした。

第一章 3

3

「到着したよ。ここが艦長室だ」

その後共通の知人であるブラウの話をしたりしながら二人は艦長室を目指し、十五分程掛けて目的地に辿り着いた。

目の前には、少々大きめで立派なドアが存在していた。

「助かった！俺一人だと絶対迷ってた所だ、ありがとう！」

先程の十五分の間にすっかり打ち解けたのか、ジュンハクの話し方からはすっかり硬さが消えていた。

グリーユーネもその方が話し易いのだろう。彼は気さくな感じでジュンハクと会話をしていた。

「どういたしまして。また帰り道で迷ったら僕に連絡をくれ、すぐ助けに行くから」

グリーユーネはポケットから携帯電話を取り出す。アドレスは既に交換した後だ。

「ああ！グリーユーネ、じゃあまたな！」

先程ジュンハクがブラウという人物の知り合いであるという事が分かった時と同様、人差し指を天井に向けるグリーユーネ。

結局そのポーズの意味は分からなかったが、今のジュンハクにはそれで十分だった。

良い人に出会えたもんだ。これから始まる新しい生活の好スタートを切れたような気がした。

そう思いながら艦長室のドアに触れる。ピツ、という生体認証の音がしてから、ドアが開かれる。

「ジュンハク！アストロハーツであります！ご挨拶にあが」

ドアを開けると、そこには壁があった。視界が塞がれるのを感じ

るジュンハク。何かと思い、頭上を見やる。

「――!?」

そこにあつたのは壁ではなかった。しかし壁のように大きくて重厚な存在が目の前に立っていた。

口をパクパクと開閉して驚くジュンハクは声も出せない。数秒後にようやくそれが壁ではないのだと分かる。

「……、」

しかしそれにしても圧倒的なプレッシャーを感じる。身長は二メートルを超え、木の幹のような太く逞しい胴体を持っている。

四肢も胴体に見合った力強さを見せ付けており、更に顔には雄々しくその存在を誇示する髭。そして鋭い眼光。

それを見たジュンハクは目の前に熊が立っているのだと判断した。それが誤解であるという事に気が付いたのは、男が右目に巻いている黒の眼帯を発見した時だった。

ジュンハクは直感する。きっとこの荒々しく猛々しい男こそが、このファイネリオンの艦長なのだ、と。

（うわあ、まるで絵に描いたような『艦長』だ！カッコいいーっ！）

「失礼致しました、艦長！明日付けで配属となります、ジュンハク「アストロハーツであります！」

子供らしい素直な感想を抱きながら、ジュンハクはびし！と敬礼する。

「……、」

しかし、艦長と思しき目の前の人物はそれに対して何のリアクションも起こさない。

……あれ。俺何か拙い事したっけ？ジュンハクは徐々に青ざめていき、やがて目の前の人物に恐怖感を抱くようになる。

「あ、あの……自分の顔に、……何か？」

「……、」

だらだらと脂汗が滴り落ちる。拙い。このままでは、喰われる――

――！

「む！」

「ひっ……！！！」

男の目がぐわ！と見開かれる。思わず瞼を閉じたジュンハクは一瞬、死を覚悟する。

ああブラウは今頃如何してるかな兄さんのグリーネとは仲良いのかなとか、まるで走馬灯のような映像が流れる。

「艦長。先程呼び出した新人が到着しましたぞ」

二メートルの巨体から放たれる野太い声。そこでジュンハクは、会話のベクトルが自分に向いていない事に気が付く。

目の前の人間が誰かを指して艦長と呼んだという事は、目の前に居る人間以外にも艦長が居て？

思考が混乱する。しかしそれも一瞬の出来事。恐る恐る瞼を開けると、目の前からは艦長と思しき人間が離れていた。

ジュンハクはオープンになった視界から情報を収集する。

やたらと広大な空間は白の壁と赤い絨毯に彩られていて、面積の大きい壁面には歴代の艦長と思われる様々な人物の肖像画。

何万という人間のトップに立つ艦長に相応しく立派な部屋だなあいやそうではなくて、などと色々な事を考えるジュンハク。

「待っていたよ、ジュンハク」アストロハーツ

そんな事を考えていると、不意に子供の声がした。目の前に居る巨漢が発する声、ではない。

ジュンハクは声の主を探す。すると、今まで背を向けていた回転椅子がぐるりとこちらを向いた。

「ようこそ。太陽系連合防衛軍所属超弩級戦艦ファイネリオンの艦長室へ」

その椅子には小柄な男が座っていた。十五歳のジュンハクと比べてもまだ小さい。

というよりは、そもその年齢がジュンハクよりも幼いように見えた。十歳前後の少年、に見える。

「え？あれ？ええつと……艦長？」

疑問符を浮かべながら、ジュンハクは近くに居る艦長？に問い掛ける。

するとジュンハクの隣に立つ大柄な男は苦笑い交じりにこう言った。

「私は副長だ。艦長は、そちらの椅子に座っておられる」

「……は？」

どう見ても自分より年下にしか見えない小柄な男を見て、ジュンハクは一瞬自分の本音を吐き出しそうになる。

しかしその瞬間どういう訳か、椅子に座る小柄な男の目が光った、ように見えた。

「うむ。僕がこの超弩級戦艦ファイネリオンの艦長だ。ジュンハク君だったね。ちょっとこっちに来なさい」

男は極めてにこやかな、子供らしい無邪気な笑顔でそう言った。

はあ、と大人しく言う事を聞いてジュンハクは少年に近付く。

「君、彼を見てくれ。彼の姿をどう思う？」

台詞を放つと同時に先程までの笑顔が一転、なんだかとてもいやらしいというか悪趣味な表情に切り替わる。

心なしか、今彼の目が光ったように見えた。

先程とは別の原因によって生命の危機を感じるジュンハク。何故だろう、という疑問よりも恐怖の方が勝っている。

彼、というのはジュンハクの隣の副長の事だろう。ニメートルを超える巨体を、ジュンハクはありのままに表現しようとする。

「え、えつと、……すごく、お」

「艦長。毎度の事ながら、部下に示しのつかない行動はお控え下さい」

だが、間一髪という所で副長が止めに入った。彼が居なければ、確実に宇宙の法則が書き変わっていた事だろう。

それに対して艦長と呼ばれる男は頬を膨らませる。子供らしいというよりそのまま子供の仕草である。

「ぶー。相変わらず副長はおカタイなあ。そう思わんかね？」

「は、はあ……」

と言われても何が何だかさっぱりなジュンハクは曖昧な生返事をする事しか出来ない。

「君はもつとサブカルチャーに対して寛容になるべきだと思うよ、全く」

「おや、心外ですな。私は素人相手に本気を出すのはどうかと言っただけですよ」

「は、え？素人？」

会話についていけないジュンハクは左右の人間を見比べる。

と、大柄な方の男がぼん、と手を叩く。何かを思いついたのだろうか。

「然らばこの通り……。少年よ！」

「は、はい！」

副長に呼ばれて背筋を正すジュンハク。これから何かが始まるのか？という期待感のようなものが走り抜ける。

「ずばり！艦長の姿を見て何か一言コメントを付け加えるが良い！」

きらり！！今度は間違いなく艦長の目が光った。とてつもない不快感を覚えるジュンハクだが、とりあえず今は副長に従う事にする。

「ええつと……ちい、さい？」

「——だあ——れが豆粒ドチビじゃああああい！！！！！」

「——げぶらばあっ！！??」

その瞬間。艦長のアップパーカットがジュンハクの下顎に突き刺さった。

漫画よろしくジュンハクの身体が宙を舞う。くると回転した後で、ジュンハクはマットに沈んだ。

「成る程、こういう繋ぎ方もありか！」

拳を握りきらきらと目を輝かせて副長を見る艦長。副長は親指を立てて語る。

「その通りで御座います。初めはこういったソフトな手でまず相手

の心を掴む事が必要でしてな」

「なんだ副長。君もなんだかんだで話の分かる奴じゃあないか」

「なんだかんだで付き合い長いですからな」

「はっはっは」

「はっはっは
じゃねええええ！」

艦長と副長が談笑していると、マツトに倒れ去った筈のジュンハクがテンカウントよりも早く立ち上がった。

「え、ちよ、ボクシングものとかノットインサービスなんですけど」

艦長、ここはやはり足元から虹を延ばすべきですぞ」

相変わらず要領の掴めない会話をする二人である。そんな二人に業を煮やしたか、ジュンハクはありのままの感情をぶつける。

「何訳分かんねえ話をしてやがる!!! さっさと話を進めろ!!!」

「……おお」

「案外ワイルドな話し方するんだねえ君は」

彼の語勢の強さに一瞬目を丸くして驚いた二人であつたが、次の瞬間にはそれは笑いに変わつていた。

「それがどうしたってんだ！アンタらそれでも軍人かよ！」

ジュンハクの言葉の直後その笑いは苦笑いに転換する。二人の顔が、真剣な表情を作り出す。

「へえ。上官に対してそんな言葉遣いをするなんて、『アンタはそれでも軍人かい』？」

「……！！」

しまった。ジュンハクは重要な事を忘れていた。ここは軍部であり、ここにいる人間は軍人なのだ。

思わず反発してしまったが、それが一体どれ程馬鹿げた行為なのか、理解した瞬間には全てが遅かった。

何も言葉を発する事が出来ないまま、嫌な沈黙が続く。

「 $\vdash$ 」

┌
:
?

しかしその沈黙は案外あっさりと破られた。艦長の少年は一度机

に顔を伏せると。

「あつはっはっはっは!!」

いきなり大声で笑い始めた。隣に立つ副長も初めは堪えていたようだが、すぐに限界がやってきて嘔き出した。

ジュンハクはただ呆然とその様を見ているだけしか出来なかった。何が起こっているのか、全く理解が及ばない。

艦長はその後暫く無邪気で純粋な笑い声を辺りに撒き散らしていたが、やがて目じりに涙を浮かべてこう言った。

「いやあ、すまないすまない。ちよつと君をからかったただけだよ……くつくつく」

「……はあ？」

「見ての通り、ここは『こういう』軍隊なんだ」

何が『見ての通り』なのか何故ここが『こういう』軍隊なのか、やはりジュンハクには分からない。

ジュンハクは少しだけ体裁を取り繕って尋ねる。

「……意味が分かりかねますが」

「良いって良いって、普通に話してくれたら。堅苦しいのは無しにしようよ」

「……???」

ジュンハクの頭上の疑問符はなかなか解消されない。

「だからさ、ここには上がどうとか下がどうとかは無いんだよ」

「はあ!？」

ジュンハクは声を荒げて先程まで頭上にあつた疑問符を真正面に展開する。

そこで艦長は椅子から立ち上がり、にこやかな表情でジュンハクにこう告げる。

「改めましてよろしく、ジュンハク」アストロハーツ君!ようこそ、宇宙一自由な戦艦『ファイネリオン』へ!」

まるでテーマパークのピエロよろしく腕を大きく広げて、歓迎の意を示す艦長。

それを見たジュンハクは最初ぱかんと表情をしていたが、やがて糸の切れた操り人形のように全身の力が抜けていくのを感じた彼は一度頭をだらりと下げる。その直後。

「は、……ははははは！！」

先程の二人と同じように、大声で笑い始めた。豪快に口を開いて、腹を抱えて笑った。

笑いは伝播し、ようやく収まったばかりの二人までもが再び笑顔になった。

「了解致しました、艦長殿！ジュンハクⅡアストロハーツ、これより気軽に話させてもらうぜ！」

敬礼と共に威勢の良い声でそう宣言してみせるジュンハク。艦長と副長は敬礼を交えつつ、にやかな表情でそれを受け入れた。

両者が敬礼の為の腕を下ろすと、艦長は何やら本来の職務であるのか机に置かれた書類に目を通しながら言う。

「いやはや君は面白いねえ。軍人としての生真面目さと子供らしい直情的なところがあって、さ」

「おいおい。見た目明らかに俺よりも年下に見えるあんたに子供らしいとか言われても、な」

彼の言葉の通り、艦長の外見はジュンハクよりも幼い。何故そんな姿をしているのか、疑問を抱かない方が不自然だろう。

「それでも実年齢は君より遙かに上なんだけどね。まあ、若作りの甲斐があつたつてもものだよ」

「ええっ！？っていうか、若作りとかいう言葉じゃ片付けられないんじゃないのか、いくらなんでもその若さは」

「あらゆる意味で常軌を逸した戦艦ファイネリオンの、更に常軌を逸した艦長であるからな」

そこで艦長は目をきらりと輝かせて何処からともなく取り出したまるでブーメランのようなサングラスを取り出すと。

「当たり前だ。俺を誰だと思ってやがる！」

「……は？『俺』？」

「艦長。一人称変わっておりますぞ。というか唐突過ぎます。

そしていくら気に入っているとはいえいくらなんでもそれは熱伝導率に誤差がありまして」

「副長。相変わらず君はなんでもかんでもオブラートに包みたがるねえ」

そして相変わらず話の流れについていけないジュンハクは、サングラスを服の中にするまう艦長をただ見ているのみ。

熱伝導率って何？この二人は何の話をしている？など色々疑問点はあつたが深くは関わらない事にした。

「さてさてジュンハク君。これにて我々との対面式は終了という訳だが、最後にどうしても聞いておきたい事がある」

「なんだよ、急に改まって。俺に何か」

「君に」

そう言った艦長の言葉は真剣で、真っ直ぐで、遊びの無い声だった。ジュンハクは面食らうが、艦長はそれを気にせず続ける。

「君に覚悟はあるか。守る覚悟が。守り抜く覚悟が」

ここまでくれば、それは何を守る覚悟なのか、なんていう事はジュンハクにだつて分かつていた。

彼は気持ち背筋を伸ばして、艦長の目をしっかりと捉えて、宣誓する。

「当然です。自分はその為にここまでやってきました。必ず守り抜いてみせます」

「なら」

艦長はそこで短く言葉を区切る。ジュンハクの眉が微かに曲がる。「全てを捨てる覚悟はあるか。今あるものも、昨日拾ったものも、明日掴むであろうものも。全てを捨てる覚悟はあるか？」

いつの間にか、艦長の言葉には重みとある種の力を感じるようになっていた。

これは恐らく比喻表現ではない。ジュンハクは実際に音の波からの力を受け取り、そしてそこに存在する質量を感じ取っていた。

物質同士はお互いに引かれあうという法則。彼の頭の中をそんな情報が流れていく。

「答える、ジュンハク」アストロハーツ。君に覚悟はあるか？」
一音一音毎に、ジュンハクの中の何かが吸引、或いは吸収されていく。

なんだこれは、どうしてこんな不可思議な力が発生しているんだ。考えるが、模範解答が見当たらない。

今やジュンハクは目の前の男が発する言葉の意味よりも、そこに存在する力と質量の事ばかりが気になっていた。

「アポロ。超重力をそんな風に使っては駄目」

そしてジュンハクはラグランジュポイントに辿り着いた。にわか
に身体が平衡を取り戻す。

謎の力に囚われていた彼はそこでようやく地に足が着いた感触を覚える。

「なんだ、イリデセンス。また超重力に引かれてやってきたのかい？」

艦長は自分の視界の隅に映る人影に対して尋ねた。アポロ、というのが艦長の名前なのだろうか。

そして少女の声。アポロ、艦長は彼女を『イリデセンス』と呼んだ。不思議な名前だ、ジュンハクの耳で何度も木霊する声。

それにも増して存在感を放つ言葉を聞き取ったような気がしたが、まだ地上に戻って間も無いジュンハクにはそれが認識出来なかった。
「強い力を感じたの。今までのどの力よりも、強くて大きい力を」

イリデセンスと呼ばれた少女が部屋の入り口から歩いてくる。

「そうか、君も太鼓判を押すんだね」

「アポロは感じないの？」

「感じる、感じているよ。ジュンハク君はとても面白い子だと、そう思っている」

ジュンハクは自分の名を呼ばれた事でようやく我に返った。視界をクリアにする。目の前にはイリデセンスという少女が立っていた。

彼女の服装は女性用の軍服なのだが、所々にひらひらしたフリルを装着している。

基本的に軍服を改造する事は禁止されているのだが、それよりも先に、ジュンハクは彼女の左胸部分にあるものを発見した。

「……特務執行官の、バッジ?!」

特務執行官。軍に属しながら階級に囚われず、また所属にも関係無しに様々な、独自の任務を遂行する資格を持つ者。

軍学校で習った知識をそのまま脳から引っ張り出したジュンハク。そんな彼に、少女は唐突に近付いてきた。

「……ふ〜ん」

彼女はそのままジュンハクの顔を間近で眺め始めた。熱い視線がジュンハクの顔全体に注がれる。

「お、俺がどうかしたのか……?」

「めっ」

「あいたっ!」

堪えきれなくなったジュンハクは言葉による意思の疎通を行おうとするが、その直後に額を人差し指で弾かれた。

まるで子供をたしなめる、というよりはそのままその通りの形でジュンハクをいさめる。

「私は特務執行官なのよ? そんな言葉遣いは、めっ」

「いや、んな事言われたってその二人が……」

「めっ」

「痛って!!」

艦長と副長の二人を指差したジュンハクは二発目のデコピンをお見舞いされる羽目になった。何故だろう、とても痛い。

「言い訳は、めっ」

なんだろう。この自由軍隊とやらは個人個人が自由を主張するあまり、自由という言葉の意味を履き違えている気がする。

なんて考えるジュンハクであったがとりあえずでも良いから態度を直さないともっと痛い事になりそうな気がしたので、一応謝る。

「……失礼致しました、特務執行官殿。以後、このような事が無いよう留意いたします」

ジュンハクの言葉を聞いた特務執行官は、

「——ッ!？」

「はい良く出来ました!お姉さん花丸あげちゃいます」

につこり笑顔で唐突に頭を撫で始めた。少女は身長差を埋める為に背伸びをして無理矢理ジュンハクの頭を撫でにかかる。

その仕草がまた可愛かったりああ暖かい手だなあ柔らかそうだなあとかまた色々な雑念が彼の頭を駆け巡る。

特務執行官の少女が頭を撫でていたのは一瞬だったが、ジュンハクが惚けていた時間は更に長かった。

「私の名前はイリデセンス。太陽系連合防衛軍ファイネリオン所属の特務執行官であります!」

形式ばっているのかいないのか良く分からない口調で自己紹介を行う少女、イリデセンス。

対するジュンハクは未だに口をぱくぱくと開閉させながら何処か遠い所を見ていた。

その様を眺める艦長、アポロはくすくすと笑いながら。

「イリデセンス。彼はジュンハク」アストロハーツという名前だ。正式な配属は明日からになる。よろしく頼むよ?」

「ええ。『知っているわ』」

にこやかな表情はそのままにイリデセンスは言う。

「面白い子なのね。お姉さん、ちよつと期待しちゃうかも」

それだけ告げると、イリデセンスは出口へ向かって歩き出した。仕事に戻るつもりなのだろうか。

そして彼女は振り返らないまま、艦長に向かってこう言った。

「これで、私達の計画が始まるのね」

アポロは黙して語らず、只安寧を欠いた表情を浮かべるのみであった。その言葉に、その顔に、一体何の意味があると言うのか。

自動ドアが音も無く開き、そして艦長室には部屋の主である艦長、

副長、そしてジュンハクの三人が残された。

「ジュンハク君。いつまでそうしてボーっとしてるつもりだい？」

「……はっ、はい!？」

自分が今まで何をしていたのか全く覚えが無かったジュンハクは、いきなり名前を呼ばれて小さく跳び上がる。

アポロはやれやれといったニユアンスを込めて腕を開き両手の掌を天井に向ける。

「先が思いやられるねえ。まあ、若いのは良い事なんだけどさ」

「ですから貴方の方が一回り若く見えている訳でして」

艦長と副長がいつものやり取りを行っていると、ジュンハクの携帯電話が鳴動を始めた。飾り気の無い淡泊な着信音だった。

「なんだか味気無いねえ。僕が持つてる曲を分けてやろうか？僕のオススメのフレーズは」

「艦長。前途ある若者を冥府魔道に落としてはなりません」

「いやいや。これは布教活動だよ？信仰の自由は守られてしかるべきだと思うんだけどなあ。ちなみに僕のオススメは」

「禁書として登録されるおつもりでしたら全力で阻止させて頂きます」

「……どんな小さなジョークにでもツツコミをくれる優秀な部下が持てた私は幸せ者だよ」

相変わらず二人の会話は要領を得ない。半ば呆れながら、ジュンハクはポケットから携帯を取り出しディスプレイを見る。

「……ん。引越し業者からだ」

「お。荷物の搬送が終わったのかい。じゃあここで時間を取らせるのも悪いね。さっさと自分の部屋に行きなさい」

「え？ああ……」

すっかりくだけた口調で会話をするジュンハクとアポロ。

とても部下と上官の会話には思えないが、どうやらこれがファイネリオン流のやり方らしい。

ともあれ、ジュンハクは艦長室を後にして割り当てられた部屋へ

と向かう。

「……賽は投げられた、か」

第一章 4

4

超弩級戦艦ファイネリオンはあらゆる面において超弩級である。

一万メートルを超す全長、四千メートルを超す全幅を誇る巨大な艦内部には様々な施設、設備が整っている。

戦艦として必要なシステムをこれでもかという位に詰め込んで、なおかつスペースに余裕があるのだ。

つまりこの艦は途轍もなく広い。それに伴って、軍司令部という一部署だけでも相当な空間を内包している。

特にこの施設内では機械的なデザインの通路が延々と続く所為で、慣れた者でもたまに迷子になる程だ。

という訳でジュンハクは迷子になる前に先程知り合った年上の少年、グリューネに連絡を取った。

グリューネは艦長室の近くにいたらしく、五分と経たずにジュンハクと合流。

艦長室であつた出来事などを話すと、グリューネは苦笑いのような表情をしていた。

やはり、この自由軍隊においても艦長という人間は特に別らしい。「つと。ここが君の部屋みたいだね」

他愛の無い話を暫く続けた後、二人は今日からジュンハクの住居となる部屋の前に辿り着いた。

「何度もすまん、グリューネ」

「良いつて事さ。友達の頼みなら無下には出来ないからね」

そう言つて、グリューネは人差し指を天井に向けた。相変わらず、そのポーズの意味は分からない。

「さて。悪いけど、今日はやる事があるからここら辺でおいとます

るよ。じゃあ、またね」

「ああ、ありがとう！」

すたすたと歩き、ジュンハクから離れていくグリユーネ。ジュンハクはその背中に対して手を振った。

グリユーネが通路の角を曲がっていったのを見届けてからジュンハクは背後を振り返る。

そこには、これからお世話になる自分の部屋。この部屋は四人部屋のようなのだ。

同居者の名前を覚えるために、ジュンハクは入り口の壁に立て掛けてある表札に目をやる。

「トライクⅡローレ、ルヴェールⅡスモーク……えっ!？」

そこで彼は、思いも掛けなかった名前を発見する。表札の三番目には、『ブラウⅡリヒト』という名前が刻まれていた。

「ブラウ!？アイツがここにいるのか!？」

いてもたってもいられなくなったジュンハクは、急いで自動ドアの生体認証システムに自分の情報を登録する。

ピッ、という動作音。住人の一人として認められたジュンハクを迎え入れて、扉が開かれる。そこには。

「あ!ジュン!」

「ブラウ!」

そこには、ジュンハクの良く知る人物が居た。ジュンハクより少し背が低めで眼鏡を掛けた少年。

少年はジュンハクの事をジュンと呼んだ。

「なんだよブラウ!お前も俺と同じ部屋だったのか!」

「そうなんだよ!いやあ、僕もびっくりしたなあ、まさかジュンとこんな形でまた会えるなんて!」

二人は互いに走り寄るとハイタッチを決めた。その後、お互いの顔を見て笑いあう。

「何ヶ月振りだっけ、こうやって直接顔合わせるのなんて?」

「卒業試験の為に猛勉強する!」って決めてからだから、三ヶ月振り

くらいだね」

「長かったよなあ、今でもあの日々の辛さは身に染みるぜ……。

パイロット志望の俺でもあんなだけ勉強しなきゃいけなかったんだから、指揮官志望のブラウなんてもっとハードだっただろ？」

「うんうん。そりゃあもうジュンの一兆倍は苦労したね」

「ははは、何だよその倍率！半端無えな！」

「でも本当に良かったよ。僕の卒業証書がジュンにとっての死刑宣告にならなくて」

「い、嫌な言い方すんじゃないよ！」

「あ、ちよつとジュンの卒業証書見せてよ！贋作かどうか鑑定するから！」

「真正正銘本物だっつの！！」

「えー？」

なんだその反応！？というジュンハクの絶叫が部屋に響いてから、彼はおっと、と口を塞いだ。

辺りを見回す。三メートルの長めの通路の両脇には二段ベッドが一つずつ設置されていた。

通路の先、部屋の奥には四畳半程の居間が確保されていた。そこには畳が敷いてある。

偶然だろうか、その様式はジュンハクの趣味に合っていた。

それらをさつと見渡してから彼は質問する。

「そついや、この部屋の他の人はどうしたんだ？」

「ああ、トライク少佐とルヴェール少佐は今仕事中だよ」

「ふうん、そうなのか」

じゃあ暫くは騒いでいても大丈夫かな、とジュンハクは適当に結論付ける。

「それよりさ、久しぶりに何かゲームでもしない？ここ最近全く手を付けてなかったから腕が鈍ってないか気になってさあ」

そつ言いながら、ブラウは自分のロッカーから色々なゲーム機を取り出してきた。

携帯ゲーム機もあれば据え置き型の物もある。その数の多さもさることながら、ここでやる事に対してジューンハクは戸惑った。

「お、おいおい大丈夫なのかよ？その、なんだっけ、トライク少佐？達に見つかったらマズインじゃねえのか？」

「大丈夫！トライク少佐もルヴェール少佐も、話の分かる人だからそんなのか？と一度疑問を抱くジューンハクであつたが、まあ息抜きになるか、と畳の上に座る。

ブラウがちゃぶ台の上にあるリモコンのボタンを押すと、壁面が縦横に分割されて内部からモニターが現れた。

続いてゲーム機とモニターとを同期させると、真っ黒だった画面にゲームのタイトル画面が現れた。

「言つとくけど手加減はしないからね？」

「腕が鈍ってるんだろ？流す程度に軽〜くいこうぜ」

二人は不敵な笑みを浮かべる。それを合図に、白熱したバトルが始まった。

激闘は暫く続いた。お互い全ての技と技を出し合った辺りで、二人はようやくコントローラーを手放した。

「四十二勝三十一敗かあ。まあ久しぶりならこんなものかな」

「だー、指が痛え……。あ、そういえばさ」

肩と手の力を抜いて、患部を冷却するジューンハク。唐突に、彼は先程出会った人物の事を思い出した。

「？」

「さっきグリューネって人に会ったぜ。お前の兄さんなんだろ？」

「……！兄、さんが？」

グリューネの名前が出た途端、ブラウの顔色が変わった。その後ブラウは所在無さ気に視線をあちこち転々とさせた。

「？……どうしたんだ、ブラウ。あ、もしかして、仲悪い、とか？」

「……そういう訳じゃないんだけど」

と、そこでブラウの携帯電話が鳴動を始めた。

「あれ。メールだ。……。ごめんジュン、緊急でブリーフィング入っちゃった。また今度ね！」

「あ、ああ……？」

それだけ言い残すと、ブラウは軍服の上着を羽織って部屋の外へと駆け出した。

部屋の中にはジュンハク一人が取り残される。熱が急に冷えて、それ程広くもない部屋が無性に広く感じる。

一人でやつても仕方ないよな、と思い、ジュンハクはモニターを壁に収納してゲーム機を片付ける。

「俺も出かけるか……」

特に行く当ては無かったが、とりあえずジュンハクは行動を開始する事にした。

これからお世話になる予定の（本来ならば上官と呼称すべき）先輩達に挨拶でもしようか、と考えて。

第一章 5

5

超弩級戦艦ファイネリオンはあらゆる面において超弩級である。宇宙船において空間という意味でのスペースというものはあればある程行動の選択肢が広がる。

遠い過去、地球人類を宇宙へと輸送する為の手段は限られていた。自ら志願しての行動とはいえ、そこでは不自由な生活を強いられる。

食料の制限、水の制限、空気の制限、そして空間の制限。

しかし、前述した通り、ファイネリオンは全長一万メートル、全幅四千メートルを超す巨体を誇る。

この超弩級戦艦は艦内に食糧生産プラントと浄化設備を完備する事で前三者を克服。後一者においては語るまでも無い。

そのようにして独立した居住空間を内包するこの艦は、途轍もなく広い。

今回はグリューネが会議中との事で彼のサポートを受けられなかった。

よって途中何度も現在位置を確認したりしながら、ジュンハクはようやく目的地へ到着する事が出来た。

彼が辿り着いたのは軍司令部の中の、彼が所属する事になる部署つまり戦闘において実際に前線に投入される戦闘機の、そのパイロットが集う詰め所だった。

ジュンハクは詰め所の扉の前に立つと、とりあえずそれをノックする事にした。

こんこんこん。扉を叩く。しかし暫く待っても反応は無い。

「？」

こんこんこん。もう一度扉を叩くが、それでも同じ事だった。

「留守、か？」

言った後で、何言っただ、と思うジュンハク。詰め所が留守だなんて聞いた事が無い。

これ以上こうしていても仕方が無いので、ジュンハクは思い切って詰め所の中に入る事にした。

「おい、誰かいな――」

「ローリーーン！！はっはあ！まあ！俺の勝ちだな！」

扉を開いた瞬間、ジュンハクの目の前には信じられない光景が広がりを見せた。

「――は？」

まず、詰め所からは何十人もの男ががやがやと騒ぐ声がした。先程の一言はその騒音のほんの一部にしか過ぎない。

次いで異常なまでの酒とタバコの匂いがした。一瞬でジュンハクの顔が歪む。

「えー！！また隊長の一人勝ちっすかー！？」

「だから言っただよ。調子良い時の隊長に叶うものなんて無えんだからよ」

「豪運……恐るべし」

部屋の中央には何やら機械的なものが沢山取り付けられた四角いテーブル。雀卓である。卓の上には麻雀の牌が散らばっていた。

その雀卓を囲むのは四人の男達。一人の男がテーブルに足を乗せて歓喜していて、残りの三人は三者三様に悔しがっていた。

「いやあ、勝利の美酒は美味いねえ！！」

言って、喜びを全身で表現する一人の男は冷蔵庫から酒瓶を取り出した。そこでジュンハクは我に返る。

「……おい！何やってんだよお前ら！」

酒瓶に口をつけようとしていた男が動きを止めて、その後ようやく部屋の入り口にいる来訪者に気が付いた。

全員の視線がジュンハクに集中するが、彼はそんな些細な事はこ

の際気にしなかった。声を大にして言い放つ。

「勤務中だろうが！何遊んでんだよ！！」

いきなりの珍客に、部屋の中は水を打ったように静まり返る。

「……あん？んだあお前は。なんでガキがこんな所にいやがる？」

雀卓の上に足を乗っけていた男がおもむろに近付いてくる。その足取りはおぼつかない。

無精ひげがぼさばさに伸びた髭面に、だらしなく着崩した軍服。

本来整っているべきものがみつともない姿を晒している。

相当酒が入っているのだろうか。男が近寄った瞬間濃縮された酒の臭いに襲われたが、ジュンハクは耐えた。

「ガキじゃない、ジュンハクだ！ジュンハク！アストロハーツ！」

ジュンハクの名乗りに対して目の前の男は初め怪訝そうな顔をしていた。

酒が回って思考が纏まらないのか、男は何かを考えるような素振りを見せる。

「ああん？誰だそりゃあ」

すると、雀卓を囲んでいた人物の内の一人が口にくわえたタバコを燻らせながら言う。

「ジュンハク……。ああ、そういえばそんな名前の新入りが俺の部屋に越してきたな。お前がジュンハクか」

「おお！新入りかあ！よくやってきたな、ようこそ自由軍隊ファイネリオンへ！

まあまあまずはこちらに来いよ、今から大人の遊びって奴を教えるやるからさあ」

「ま、待てよ！俺の話はまだ……！」

「はははは！ペーペーの新入りからも力モるなんて、隊長大人気無いつすよー！」

「頑張れ新入り」

「ああ、俺が席譲るわ。だから盛大に散ってこい」

ばんばんと勢い良く背中を叩かれてむせるジュンハク。卓を囲む

椅子に座らせられそうになったところで、ジューンハクは叫ぶ。

「何やってんだ、って言ってるんだよ！遊んでんじゃねえよ、仕事はどうした！」

彼の大声で部屋の空気が一気に冷却される。再び、部屋中の人間の視線がジューンハクに集中する。

酒瓶を持っていた男がゆらゆらと近付いてきて、至極面倒そうな口調で告げる。

「仕事？お？何勘違いしてんだ坊主。真面目にやってるじゃねえか、詰め所で勤務してんだからよお」

「これが仕事？本気で言ってるのか？どう見ても遊んでるだけじゃねえか！」

「……あゝ。お前あれか、さては真面目にガリ勉してここ入ったくちだな？」

「だったら何だっていうんだ？」

「あれっ、今時そんな奴マジでいたのかよ？すっげー、都市伝説に出会っちゃったよー」

「成る程。道理でこのルールを知らない訳だ」

「哀れ新入り」

「……？」

酒瓶の男に続いて、雀卓を囲む男達は口々におかしな事を言い出す。

「おっし。じゃあ質問だ。この艦を守るのは誰の仕事だ？」

「いまいち要領を得ない質問を受けて困惑するジューンハク。」

「誰って、そんなの決まってるじゃねえか。『俺達』パイロットだろ？」

「ぶっぶー！！外れも外れ、大外れだ新入り君！良いか？この艦を守ってるのは、この艦、なんだよ」

意図してなのか酒の影響なのか、酒瓶の男は一句一句を区切って言う。

ジューンハクはそれを鬱陶しく思いながら、男の言葉の意味を尋ね

る。

「どういう意味だよそれ。じゃあ俺達パイロットは何をすれば良いんだ？」

「だあから言ってんじゃねえか、俺達の仕事はここに勤務する事。それ以上でもそれ以下でもねえんだよ。

さあてレクチャーは終わりだ、良いから早くこっち来いって！」

言っで、男はジュンハクをもう一度雀卓に座らせようとする。

「ちよつ、止めろって言っでんだろ！俺はパイロットになりたくてここまで……！」

「はいはい分かった分かった。後でフライトシミュレーターに乗せてやるからまず卓を囲もうぜ」

「——そこまでだ！」

ジュンハクが強引に椅子に座らせられそうになった瞬間、開け放たれたドアから男の声が響いた。

「グリューネ！？」

声の主はすぐに分かった。ここ数時間の間に何度もジュンハクを助けてくれた人物、グリューネ「リヒト」だ。

彼は静まり返る詰め所をかつかつと甲高い足音を鳴らしながら進み、ジュンハクの元までやってくる。

詰め所にいた全員がその様子をただ黙ったまま眺めていた。酒瓶の男はその姿を見ると、にわかに険しい表情を形作る。

「……またてめえか、グリューネ。ファイネリオン一のガリ勉野郎が、こんな所に何の用だ？」

「言わなくても分かりきっている事でしょう。その少年を解放して下さい。彼は貴方達のようなごろつき連中とは訳が違います」

ごろつき連中、という言葉に周囲の男達がびくりと反応する。彼らがグリューネを歓迎していない事は明らかだった。

酒瓶の男はずい、と身を乗り出すと、グリューネの額に自分の額をぶつける。

「随分偉くなったもんじゃねえか、艦長の腰巾着が。俺の階級は知

つてるよな？」

「ええ、存じておりますとも。『レヴ・ロミナス』中佐殿。それが何か？」

酒瓶の男の名前はレヴ・ロミナス、階級は中佐、という断片的な情報だけがジュンハクの頭の中にストックされる。

「上等だ。軍じゃあ階級が絶対だっていう堅つ苦しい規律をこの自由軍隊に持ち込んだためえらしくもねえ台詞をありがとよ。

で、なんだっけ？この中佐殿に指図するってなあ、お前が一番大好きな規則に反するんじゃないのか？」

「では系統を変えましょう。ジュンハク、上官命令だ。私の元に来なさい」

「ま、待てよグリューネ！俺はこいつらにまだ言わなきゃならねえ事が！」

「命令だ」

突然の出来事にまごつくジュンハクであつたが、グリューネはそうやって困惑するジュンハクを一睨みする。

先程自分を助けてくれた時とは明らかに違う、刃物のように研ぎ澄まされた視線と口調にジュンハクは何か薄ら寒いものを感じた。

しかしそれすらも一瞬の出来事で、グリューネの有無を言わさない気迫に吞まれたジュンハクは『命令』に従う事にする。

だがその前に、とジュンハクは一度だけ振り返ると何かをつぶやく。

「……るんだ」

「あ？」

「——俺が守るんだ！この艦を、皆の住む世界を！俺が地球を守るんだ！」

彼の背中に対して酒瓶の男、レヴは再びボトルの中の液体を口に流し込むと、ジュンハクに向かってこう言う。

「へっ。何にも知らねえガキの青臭い台詞だな。地球を守るなんて大それた事を平気で言っただけやがる」

「……、」

「運が良かったな、お優しい上官殿に恵まれて、よお？だが覚えとけよ。」

そいつは『この軍を切り捨ててもこの軍を守る』なんて事を考えてるとんでもねえ男だ。

お前も、そいつに切り捨てられたくなけりゃとつとつちに鞍替えするんだな、命があるうちに、よ」

「……余計なお世話だ」

そおかい、という返答を聞くよりも早く、詰め所のドアが閉ざされた。

第一章 6

6

「すまん、グリユーネ……またお前に助けられた」

「良いって事さ」

ジュンハクとグリユーネの二人はパイロットの詰め所を離れて、軍司令部居住ブロックの近くにある休憩所のベンチに座っていた。四角く切り取られた空間の壁には海。勿論本物の海ではない。スクリーンに映し出された虚像だ。リラックス効果を狙ったものだろう。

二人の隣には省スペース、省エネルギーを徹底したデザインのものに移り変わった、飲料の自動販売機がいくつか並んでいる。

ジュンハクは遥か大昔から存在する炭酸入りのジュースを、グリユーネはコーヒーを飲んでいた。しばしの間。

「俺、絶対あいつらみたいにはならねえ」

その沈黙を破ったのはジュンハクのつぶやきだった。グリユーネは黙ってそれを聞いている。

「俺が地球を守るんだ。あいつらなんかには任せておけねえ。俺が守るんだ」

そう言って、ジュンハクは缶の中の液体を一気に飲み干した。炭酸の気泡が喉を通ってむせ返る。

グリユーネはそんな彼を横目にコーヒーを啜りながら言う。

「立派な使命感だと思うよ」

気泡が全部抜け切るよりも早く、ジュンハクはベンチから立ち上がった。

「……グリユーネ。俺、ちょっと訓練所に行ってくる。少しでもパイロットとしてのスキルを身につけたいんだ」

「それが良いね。場所は分かるかい？」

「大丈夫だ。……詰め所の前を通らなきゃ行けない事以外は、な」
それだけ言い残すと、ジュンハクはさっき歩いてきた道を折り返した。目的地を確認してから、一気に駆け出す。

誰かにぶつかるかもしれないという危険性も考えずに、全力で走る。

「わっ！」

そしてその危険は現実のものとなった。自分よりも一回り程小さな身体がジュンハクによって突き飛ばされ、地面に倒れる。

「あいたた……。あ、あれ？ジュン？」

そこに転がっていたのはジュンハクの親友でありルームメイトでもあり同僚でもあるブラウだった。

彼は突然の出来事に呆然とした表情を浮かべていたが、やがてジュンハクの顔を認識すると、勢い良く立ち上がって言う。

「ちよつと！気をつけてよね！少しゲームで負けが込んでたからってこれは無いでしょ！」

「……、」

「全くコレだからジュンは！……ジュン？どうかしたの？」

「——お前も」

ジュンハクの様子がおかしい事に気が付いたブラウは怪訝そうな顔でジュンハクを見る。

そんなブラウを見ていたのか見ていないのか、とにかくジュンハクは自分の言いたい事だけを告げた。

「え？」

「お前も、ゲームなんかするくらいだったらもつと働けよ」

「はあ？何それ？ゲーム大好きなジュンからは考えられない台詞なんだけど。何かあったの？」

ブラウの問い掛けに対して、ジュンハクはいまいち噛み合わない言葉で返す。

そしてジュンハクはあまり唇を動かさないまま、小さな声でポツ

リと呟く。

「――俺が地球を守るんだ」

「え？今、なんて？」

ブラウがもう一度質問してみるが、ジュンハクは何の反応も示さない。そして彼はぶつかつた相手の事など気に留めなかつた。

なんでもないと誰にともなく告げて、それからすぐにもう一度走り始めるジュンハク。

「……おい。話が見えないんだけど」

ぽつんと取り残されたブラウただ一人が、軍司令部のとある十字路に佇んでいた。

第一章 7

7

（俺が守るんだ）

ジュンハクは大きなショックを受けていた。親友であるブラウを突き飛ばしてもなおその事実を認識出来ない程、にである。

この艦を守る存在が、地球を守る存在が、怠惰と墮落に沈んだ存在である事を知ったのが原因である事は言うまでも無い。

まだ十五歳の少年に過ぎないジュンハクには夢があつて、希望があつて。それを今日、無残にも壊された。

大袈裟な話に聞こえるだろうか、しかしそれでも、それはジュンハクにとつての真実だった。

夢を描いて希望を抱いて今まで努力を重ねてきた自分への、あまりにも酷い仕打ち。ジュンハクはそう捉えていた。

「ここが、訓練所か」

飲料の自動販売機がある休憩所から走る事数分、ジュンハクは目的地に到着した。

そこには学校の体育館を何倍にも拡張したような、広大な空間が存在している。

ただしその空間に設置されているのはもちろん遊具などではなく、真正正銘の兵器だ。

広大な空間を有するこの場所は、沢山の機械音で満たされている。各種兵器のメンテナンスを行う為に稼動している、AI搭載型のロボットから発せられる音だ。

磁気ディスク並みの小型のものから人間大のもの、更には五メートルを超す大型のものまで様々なロボットが働いている。

ジュンハクは一度だけそれらを見やった後、目当てのものを探し

始める。

あった。金属製の壁に、生体認証を行う為のセンサーが設置されている。

（グリユーネの話通りだ。ここが目的地みたいだな）

ジュンハクは迷い無くそのセンサーに自分の身体を通した。ピツ、という動作音。

センサーのすぐ傍に取り付けられたディスプレイに警告文が表示される。壁から離れる、との事だった。それに従うジュンハク。

すると今まで一枚の壁だと思っていた金属の板が開放された。金属の壁は今、扉としての役目を請け負っている。

ジュンハクはやはり迷わず、その扉をくぐって内部に進入する。

金属の壁に囲まれた空間から、もう一度金属の空間へ。

彼の存在を認知したのか、天井に設置された明かりが自動的に灯される。すると、部屋の中心に座する物体の存在が明らかになった。

「……ゲイルローダー」

『ゲイルローダー』。ジュンハクはその物体を見てそう呟いた。

それは一対の翼と球状のコックピットを持つ戦闘機だった。

といっても遥か大昔に地球の空を飛び回っていた戦闘機とは全くの別物である。

過去の流体力学や材料力学、航空力学を鼻で笑うかのような特殊なデザイン。

軍学校で見慣れていたのだろう、ジュンハクは特にそれらの要素を考慮する事無く機体のコックピットへと向かう。

球状のコックピットはジュンハクの手が触れた瞬間上下に開き、彼の存在を歓迎した。

ジュンハクはそのままコックピットに乗り込む。その瞬間、ゲイルローダーのキャノピーは閉ざされた。

「フライトシミュレーター起動。戦闘パターンEの十八」

ジュンハクの命令に従って、ゲイルローダーは戦闘シミュレーションのプログラムを起動した。

戦闘パターンEの十八。それは軍学生が卒業試験として課せられる課題の一つだった。当然難易度は他よりも高い。

正面のディスプレイに浮かび上がる、「READY?」の文字。ジュンハクは引き金を引いて其れに応えた。

球状のコックピットの内側に宇宙が映し出される。何処までも現実のそれに近いリアルな映像。

「ミッシヨンスター」

そして仮想空間での訓練が開始された。何も無かった宇宙に、円盤状のターゲットが出現する。

ジュンハクはゲイルローダーを操縦し、次々に現れるターゲットを逐一破壊していく。

順調に見えた訓練はしかし、ジュンハクの小さなミスによって強制終了される。

ターゲットから発せられるビームが、ジュンハクの機体を直撃した。ジュンハクが一瞬目を放した隙に起きた出来事だった。

ディスプレイに戦闘結果となるスコアや今後の課題等が表示されるが、彼はそれらを全て無視して叫ぶ。

「くそっ！次だ次！」

彼の声に反応して画面が切り替わる。再び「READY?」の文字。ジュンハクは即座に引き金を引く。

結果はやはりジュンハク機の撃墜で終わった。またも注意不足によるミスだった。

その後何度も何度もシミュレーターに挑戦するジュンハクであったが、結果は変わらなかった。

気持ちばかりが先行して身体がついていない、という戦術指南が空しくジュンハクの目の前に広がる。

「……はあ。何やってんだ、俺」

やがて全身を襲う疲労に気が付いたのか、ジュンハクはコックピットのシートに全体重を預けた。

気分転換に他の人間のシミュレーターでも見てみるか、と思って、

ジューンハクはモニターを弄る。

（……あんな奴らが真面目に訓練やってるとは思えないんだがな）
ジューンハクの予想は半分以上当たっていた。

救援任務であるのに救援対象である輸送艦を撃沈したり、味方同士で潰し合ったりと、散々なものだった。

これをやっている人間はお遊びのつもりでやっているのだろうという事が明確だった。

それを見てジューンハクのモチベーションがまた一段と下がる。

こんな連中には任せておけない、という気持ちが湧き上がってくるも、どうにも身体が動かない。

かちかちという操作音と共に映像が次々に切り替わる。下らない、つまらない、面白みの無い訓練風景の数々。

我ながら無意味な事をしているなあ、と自分の行為を嘆くジューンハクだったが、そこでふと彼の手が止まった。

「——！このパイロット……」

——居た。他のパイロットとは明らかに違う挙動を取るパイロットが。

周囲の人間というか、この軍に所属するパイロットが皆おしなべて奇妙な動きをするので、そのパイロットだけが周りから浮いていた。

ジューンハクは手元のコンソールを叩いてそのパイロットの戦闘に注目する。

無駄の無い動き。戦況全体を捉えられる視界の広さ。的確な判断を下せる思考。それにしつかり追従する操縦技術。

このパイロットは別格だ。ジューンハクは直感した。すぐさまコンソールを弾いて他の情報をモニターに表示させる。

パイロットの持つスコアのランキングが表示される。他の追従を許さない断トツの一位が存在している。

その第一位の存在も目立って映ったが、ジューンハクはそれよりもその二つ下の順位のパイロットに着目する。

『ヴァルツールナライト』。階級は中尉。第三位とはいえ、そのスコアは第四位以下のパイロットを明らかに突き放していた。

「すっげえ……！こんな奴が居るんじゃないか！あんな不真面目な奴らばかりかと思ってたけど……こいつはすげえ！」

希望に目を輝かせる少年のような、というよりそのまま少年の目で、ジュンハクはヴァルツ中尉の戦闘に見惚れていた。

戦闘終了後、ジュンハクはもう一度コンソールの上で手を躍らせる。現在使用中のゲイルローダーを検索する為だ。

検索結果が表示される。ヴァルツ中尉は偶然にも、ジュンハクのすぐ隣で訓練中だったらしい。

勝手な幻想ながら、ジュンハクはその中尉の事を、背が高く恰幅の良い銀髪（？）の青年だと夢想していた。

もう一度重ねるが、これは完全にジュンハクの妄想である。

そんな空想を抱いたまま、ジュンハクはゲイルローダーのコックピットから飛び降りて、隣の格納庫へと走った。

生体認証を手早く済ませると、ヴァルツ中尉が搭乗中であると思しきゲイルローダーのコックピットを叩く。

「ヴァルツ中尉！さっきの戦闘見たぜ！俺思わず感動しちゃったよ！」

「ごんごんごん、というノックの音。しかし、ゲイルローダーのキヤノピーが開かれる気配は無い――。」

「ヴァルツ中尉！どうしたんだよ、早く開けてくれよー！」

――と、思われた扉は勢い良く開かれた。そして。

「……へ？」

直後、何か黒い物体が急速接近してきた、事をジュンハクは認識できていたのだろうか。

豪速、快速、とにかくとんでもないスピードで迫る黒の物体。

それは靴底だった。滑り止めの付いた黒いゴムの塊。その先にはしなやかに伸びる脚――なのだが、視認する前に衝撃がやってくる。

「痛、っ、てえー！ー！？」

首が後ろに折れ曲がるかと思うくらいの強烈なインパクト。その次の瞬間には地面との衝突。ジュンハクは思わず絶叫する。

余りのダメージに頭の中が真っ白になった。目を開いているのに視界がぼやける。

だが辛うじて聴覚は無事らしい。ヴァルツ中尉の言葉と思しき声が聞こえてくる。

「上官に向かってため口を使わないでよね。新米のくせに図々しいとは思わない訳？」

凜とした、強い意志を全面に押し出した、――少女の声。

「……あん？」

予想外の声にジュンハクは一瞬面食らって、とぼけたような鳩が豆鉄砲を食らったような声を返す。

「……女？」

「……何よ、その反応は？」

沈黙する事数秒。思案する事また数秒。十秒以上間を置いてから、ジュンハクの中の何かが音を立てて崩れた。

先程まで彼が勝手に思い描いていた理想の『ヴァルツ＝ルナライト中尉』が破壊し尽くされる音だった。

そこまでショックだったのだろうか、恐らくショックだったのだろう、地面をごろごろと転げ回って悶え苦しむジュンハク。

「……そ、ん、な、馬鹿なああああ！？お、俺のヴァルツ中尉を返せええええ！！？？」

そこにもう一度蹴りがぶちかまされた。地面を転がる力を利用されたのだろうか、豪快に壁まで吹っ飛んでいくジュンハク。

「げ、が……ごへごへ……っ！？」

「名前で呼ぶな。あと返せて何よ。変な妄想すんな変態」

なんというかとっても締まらない格好のジュンハクであったが、そこで彼は目の前の少女、ヴァルツを見る。

するとジュンハクはどうにも締まらない様子のヴァルツ＝ルナライトを発見した。

「一つ良いか？」

「許可を取ろうとしてる辺り少しは進歩したようだけど、それでもため口って何よ。大体あん——」

「パンツ見えてんぞ」

「——ッ?!」

上官としての振る舞いであつたのか先程の少々高圧的な気風が一変、途端に顔を赤くして恥ずかしがる少女、ヴァルツ。

超弩級戦艦ファイネリオン内部の自由軍隊女性服は思わず目を見張る程の超弩級ミニスカだった。

当然、キックなんてものを放てば内側に隠されている布が外側に晒される訳で。

「み、みつ、みつ、見たわねあんた!？」

「おう。つつか案外可愛い柄のやつ履いてんだな、でも俺の『ヴァルツ=ルナライト』のイメージに合わないから却下」

「何その意味不明なコメント!? 勝手な妄想抱いてんじゃないわよ!——」

目の前の変態(?)を蹴散らす為にもう一度脚を振り上げようとするヴァルツであつたが、寸前で重要な事に気が付いた。

このまま蹴りをお見舞いしようとするれば、確実に先刻の二の舞になる。

そして地面に転がるジュンハクに対しての攻撃手段がそれしかないという事を悟ると、へなへなとその場に座り込んだ。

それを見たジュンハクはゆっくりと立ち上がり、そしておもむろに隣の格納庫に向かって歩き始めた。

「どっ、何処行くのよ! 私の話はまだ終わってないわよ!？」

至極面倒そうに首の調子確かめたり後頭部を掻いたりしながら返すジュンハク。

「何処って、シミュレーターだよ。もっと訓練積まないといけねえんだからさ」

背を向けたまますたと歩いていくジュンハクに、ヴァルツは

後ろから声を掛ける。

「ちよつと待ちなさい！」

「んあ？」

気の抜けた声で応じるジュンハクであったが、ヴァルツがいちいちそれを咎める事は無かった。いや、余裕が無いのか。

とりあえず振り返るジュンハク。そこには勢い良く立ち上がるヴァルツの姿があった。

彼女は左手でミニスカートの前の部分を押さえながら右手でジュンハクの事を指差していた。

第一声は威勢良く発せられたものの、その後続く言葉の歯切れが悪い。んぐう、とか、意味の無い音が断続する。

「何だよ？」

「……っ、勝負しなさい！」

「……はあ？」

いまいち話の意図が掴めないジュンハクは思わず首を傾げた。誰が、とか、何で、とか、色々情報が不足している気がする。

ヴァルツはゲイルローダーをずびし！と指差して言う。……なん

で？と別の方向にもう一度首を傾げるジュンハク。

「勝負よ、勝負！私が勝ったら今までの無礼を地に顔突き付けて死ぬまで謝りなさい！！」

「いや、謝れっておま」

「お前じゃない！ヴァルツ＝ルナライト中尉よ！」

「え、じゃあヴァルツ」

「名前で呼ぶのも却下！！」

「じゃあルナ」

「略すな、却下！！」

「すわ、とんでもねえ我が儘おん——！」

「——ちよつと黙りなさいよあんた！！」

矢継ぎ早の会話の連続の最後は、何だそりゃ——！というジュンハクの叫び声で締め括られた。

「良いから早くゲイルローダーに乗りなさいよ！」

「えー、面倒だな」

背を向けたまま立ち去ろうとするジュンハクであったが、その次のヴァルツの一言で彼はぴたりと足を止めた。

「あら、私に負けるのが怖いのか？」

あけすけな挑発だったが、ジュンハクはその言葉に見事に乗っかり、こめかみに青筋をわななかせた。

「言ってくれるじゃねえか。女子供だと思って手加減してくれるなんて期待してんじゃねえだろうな」

「まあ仕方無いわよねーペーペーの新入りだもんねー。ところであなたのスコアってどんなもんだっけー。

あらまあEの十八程度がクリア出来ないのーごめんなさいねー大きなお世話だったかしらー」

ぶちい！と、先程の青筋が焼き切れる音がした。ジュンハクは完全に頭に熱が回った状態で叫び散らす。

「上等だ！俺の華麗な操縦テクですぐその減らず口塞いでやるからちよつと待ってろ！」

ばたばたばた！という忙しない足音と共に隣の格納庫へと走り去るジュンハク。

少しだけ冷静さを取り戻したヴァルツは、彼の背中を眺めながら、口角を吊り上げて邪悪な笑みを浮かべる。

そしてジュンハクは先程自分が搭乗していたゲイルローダーのコックピットに飛び込むと、勢い良くキャノピーを閉じた。

画面が切り替わり、仮想空間である宇宙が目の前一杯に広がる。

操縦桿を荒々しく掴み取ると同時に、通信回線が開いた。

『はっ、あーい！心の準備はオツケーかしらEの十八程度がクリア出来ない新入りくん？』

「ふざけんな！一度はクリアしたミッションなんだ、俺が本気になつたらこんなもん瞬殺だつつの！ー」

『せいぜい自分が瞬殺されないように気をつけなさいよねー？じゃ

「始めるわよー」

彼女の声が途切れた瞬間、モニターには先程から何度も目にして
いる『READY?』の文字。

ジュンハクはその問い掛けに、手の中にあるトリガーで答えた。
その瞬間、目の前の宇宙空間が急激に加速する。

その加速に追従するスピードでターゲットが展開されていく。レ
ーダーに映る無数の機影。

ミッションはこの無数のターゲットの内、百枚を撃ち抜けば良い、
というものだった。

ジュンハクは自分の持てる最高の作戦でその千枚を達成するつも
りだ。

（最初の内は命中精度なんて関係ねえ、とにかく撃ちまくればどれ
かは命中すんだよ！）

ジュンハクはまず、数多くの標的が密集しているエリアにゲイル
ローダーを飛ばした。

大量にばら撒かれた的に対してジュンハクはとにかくそれを上回
る数のビームを撒き散らす事に徹する。

事実、彼の思惑通りにターゲットは次々とビームで焼かれていっ
た。密集していた無数の機影が散らばって点になっていく。

「はっはあ！調子良いぜ！こりや最高スコア更新してるかもな！」
上機嫌のジュンハクは通信機の向こうのヴァルツに話し掛けるが、

彼女の反応は冷ややかなものだった。

『その程度？残念ね。もつと齒ごたえがあるかと思っていたけど』
「ん？」

あまりにも冷静なその声に、ジュンハクはモニターの端に映るヴ
アルツ機の挙動を見る。その瞬間だった。

「うおおっ！？」

ジュンハクの乗るゲイルローダーが前後左右に大きく揺さぶられ
た。

何事かと思いモニターの方を振り返ると、そこには被弾によって

ダメージを受けた事を示すパラメータ画面。

今まで単なる的としての役割を遂行していた円盤状のターゲットは突然その姿を変えた。

円盤の真ん中から突き出してきた銃身から、無数の弾丸がばら撒かれる。それはジュンハクが射出した弾数を明らかに上回っていた。「う、おおお!!」

高密度の弾幕の中を叫び声と共に駆け抜けるジュンハク。だが、チェックメイトはもう目前まで迫っていた。

虎子を得ようと踏み込んだ虎穴からは、牙を剥いた虎が這い出てきている。その数は十や百ではない。

今やジュンハクのゲイルローダーは絶体絶命の状況にあった。ヴアルツはそんな彼を横目で見ながら笑みを浮かべる。

「彼我の戦力差を把握した上で、的確なポイントに的確な攻撃を加える。細かな敵の各個撃破がゲイルローダーの役目。」

戦果を上げる事ばかりに気を取られて自分を見失った者はパイロットとして重要な部分を見落としているのよ」

言いながら、ヴアルツの機体は出撃地点よりさほど遠くないエリアで、向かってくる敵の迎撃を行っていた。

ゲームのような大袈裟な挙動は必要無い。派手に動き回らず、あくまで冷静にターゲットを撃破していくヴアルツ。

相手にする敵の数が少なければ、それだけ被弾のリスクが減る。敵から発せられる攻撃も、十分見切って回避出来るだけの余裕を持っていた。

それでも撃墜数は順調に伸び続け、序盤でジュンハクが撃ち落した数をあつという間に追い抜いた。

ジュンハク機のダメージが限界を迎え、ヴアルツ機が目標を完遂しようとした、その瞬間だった。

「——!?!」

突然、ヴアルツの搭乗するゲイルローダーのモニターが真っ赤に染まった。大量のエラーメッセージで画面が埋め尽くされたのだ。

機体が緊急停止し、モニターには『MISSION FAILED』の文字。

「うわっ!？」

そして異変はジュンハク機にも訪れた。こちらもヴァルツ機と同じく、機体が大破した事を知らせるメッセージが。

突然の出来事に、ジュンハクは何が起きたのかも分からないまま呆然とするしかなかった。

しかし、ヴァルツだけは異変が生じる寸前の出来事を把握していた。

彼女はゲイルローダーのキャノピーを開放すると、彼女を待っていたかのごとくその場に佇んでいた男に声を掛けた。

「——ロミナス中佐!」

「……!」

その声はゲイルローダーの通信機を通じてジュンハクにも届いていた。ロミナス、という名前には聞き覚えがあった。

それもその筈。その名前は、腐敗の温床と化しているパイロットの詰め所に居た、あの男の名前だった。

ジュンハクはすぐさまゲイルローダーから飛び降りると、ヴァルツの機体がある隣の格納庫へ走り出した。

扉を開けるとそこには五、六人の男達と、それに真正面から向き合うヴァルツの姿があった。

間違い無い。ジュンハクは確信する。そこに居るのは、詰め所でたむろしていた男達だった。

「おい、お前ら!」

ジュンハクは直感的に、その男達が何かやかしたのだと思った。本能が告げるままに、ジュンハクは男達に接近していく。

その中のリーダー格の男、レヴといったか、は、陽気な様子でジュンハクに話し掛ける。

肩を怒らせ相手の顔を睨みつけるジュンハクとは対照的な態度だった。

「おう、新入りのガキ。随分精が出てるじゃねえか。正式配属される前からこんな所でパイロットごっこなんてよ」

「ガキじゃねえ、ジュンハクだ！それに、ごっこ遊びなんかじゃねえよ！」

「ごっこ遊びじゃねえか。機体が大破したのに傷一つ無えだろ？俺はそれを教えてやろうと思ったんだよ」

レヴはすぐ傍にあるゲイルローダーを親指で差しながら言う。彼の言葉の通り、ダメージは何処にも見当たらない。

彼の口ぶりから、ジュンハクはある事を悟る。

「教えてやった……？まさかてめえ、俺達をわざと狙いやがったのか！？」

「おいおい、今の今まで気付かなかったのか？ありやあ、こいつは駄目だ。周りの状況がなあんにも見えてねえんだなあ」

レヴが両手の掌を天井に向けて呆れ返ると、周囲にいた男達も腹を抱えてげらげらと笑い始めた。

明らかに人を馬鹿にしているのが見て取れる、下卑た笑い。それを聞いたジュンハクの怒りが、急激に過熱し始める。

「まあそついうこつた。こんなもんやったって何の役にも立たねえから——」

「——ふざけんなよ！」

レヴの言葉を聞き終える前にジュンハクはありつたけの力を込めて叫ぶ。

耳を塞ぎ眉を尖らせて嫌悪感を顕にするレヴであったが、ジュンハクはいちいちそんな事を気にしたりしなかった。

彼は自分の腹の奥から湧き出て来る言葉をいっぺんに並べ立てる。「この際だからてめえらがだたらやってんのは構わねえよ、だけど真面目にやってる奴らの邪魔なんかしてんじゃねえよ！！

いい年したおっさんが大人げ無え事やってんな、恥ずかしいと思わねえのか！」

「へえ。ガキのくせに言う事だけはいっちょ前じゃねえか。そつうい

う所は嫌いじゃないぜ？」

だがな、とレヴはずいとジyunハクに近付いた。明らかな身長差に威圧の気を感じるジyunハクだが、辛うじて怯まず堪える。

かと思つと、レヴは人差し指をジyunハクの額に突き立てて言い放つ。

「真面目にやつてる奴が全員報われる、なんて考えはさつさと捨てる。でなきゃ、それが命取りになるぞ」

レヴの口元には笑み。しかし刃物のように鋭く尖った目は確実にジyunハクのそれを捉えていた。

「……大きなお世話だ、つて言つてんだろ。俺はお前らとは違う」「口だけは達者な奴だ。しかし残念だな。俺達と違う、つて事はお前もあつちの女と同族かよ」

……女？ジyunハクは熱くなつた頭で少しの間だけ考え、そしてすっかり意識の外へと押し出されていたヴァルツを思い出した。

ヴァルツの方を振り向くジyunハク。そこには毅然とした表情で周囲の男達を睨みつける彼女の姿があつた。

「ロミナス中佐。これは何の悪い冗談ですか。自分達は——」

ヴァルツの言葉は最後まで続かなかつた。彼女を囲む男達の一人が、こんな事を言い始めたからだ。

「——『死神女』。次のターゲットはそいつつて訳かい？」

「——っ——！」

途端、ヴァルツの表情が凍りついた。瞳が小さく収縮し、唇が震えて声が出せなくなる。

何故彼女が死神女と呼ばれているのかなど些細な事だ。その名の由来を考えるなんて事で、ジyunハクは戸惑つたりしない。

再び熱源を得たジyunハクの頭が熱暴走を起こす。許さない、という言葉が脳内で暴れ出す。

「てめえら、いい加減に——！」

「止めて」

ジyunハクが何かを叫び散らす前に、ヴァルツの細い腕がジyun

ハクの目の前に現れた。それが制止のサインである事は明白だ。

全身に行き渡ろうとしていた熱が空回りして、脳内が一時的に真空状態と化す。何の感情も無い空虚な空間。ストップモーション。

その隙を突いたのか、ヴァルツは俯いたまま、ジュンハクに向かってつてもう一度制止の合図を出す。

「止めて。お願いだから」

ぼそぼそという、消え入りそうな程小さな声。しかしその声は確かににはつきりとジュンハクの耳に届いた。再び訪れる空虚の間。

ジュンハクは元より、相手側のレヴまでもが、ばつの悪そうな顔になっていた。

その表情のままレヴは、『死神女』と呼んだ男の後頭部を軽く叩く。痛て、という軽い反応。

「……余計な事口走ってんじゃねえよ」

「だ、だけど隊長……」

「言い訳すんじゃないよ。あと、その呼び名は止める。反吐が出そうなんだよ」

本当に吐き出しそうな程気分が悪そうにして、男の目をじろりと睨みつけるレヴ。睨まれた相手の男が一瞬で萎縮する。

「あーあ、興ざめだよ。おいお前、今から全員分の酒となんかつまみになるもん買って来い。五分だぞ」

「ええーっ、お、俺っすかあ?!」

「他に誰が居やがるんだよ。さっきの麻雀の負け分プラスアルファだ。さっさと行ってきやがれこの馬鹿」

わ、分かったよ……、という腰の引けた台詞とともに、男は駆け出していった。居住区のコンビニにでも行ってくるつもりなのだろう。

「さあ、俺らも帰るぞ。もう一回酔い直しだ」

レヴの合図に従って、周囲の男達が彼の背中を追う。格納庫の外へと向かっているのだろう。

その行動によってようやく硬直が解けたジュンハクはその背中に

声を掛ける。

「お、おい待てよ!」

「じゃあな、新入りのガキ。実戦じゃあ後ろから撃たれないように気をつけろよ」

男達を率いたレヴはひらひら、と手の平を何度か翻らせる動作を交えて格納庫から立ち去る。

彼らが去った後には、ジューンハクとヴァルツの二人と、物言わぬゲイルローダーのみがぼつんと取り残された。

「……どういう事だよ」

ぼつりと零れる、ジューンハクの声。答えるものは誰も居ない。彼は続ける。

「どういう事だよ!なんだよ『死神女』って!ふざけてんのか、そこまで腐ってやがんのかよあいつらは!」

「止めなさい」

「止まるか、止まれねえんだよ!マジで頭にきた!俺はもうあいつらをぶつ飛ばさなきゃ気が済まねえ!」

「止めてよッ!」

響き渡るヴァルツの絶叫。血の上った頭が緊急停止する程の、張り裂けそうになるくらいの痛烈な叫び声。

見れば、ヴァルツの目元には涙が浮かんでいた。滲み出てきたそれを必死に抑えるようにして、少女は言葉を紡ぐ。

「止めてよ。お願い、止めて……」

「……っ」

彼女の懇願に、ジューンハクはただ押し黙る事しか出来なかった。

重い、沈黙。

たっぷり分単位の静寂。しかし一向に空気は入れ替わらない。

痺れを切らしたジューンハクは溜め息混じりにヴァルツに声を掛ける。

「……あー、なんだ。しばらくそこのベンチで休んでろ。何か飲み物でも買ってくる」

「……要らない。もう放っておいて」

「放っておけるかよ。良いから俺の言う通りにしろ」

「私の方が階級は上よ。命令されるいわれは無いわ」

それが彼女の強さなのだろうか、ヴァルツの毅然とした口調は変わらない。

しかしそれがただの強がりである事くらい、誰の目にだって明らかだった。

ジュンハクはばりばりと乱暴に後頭部の髪の毛を掻き毟って言う。

「……だーっ、面倒な奴だな！階級なんて関係無いだろうが！」

「軍規は軍規よ、それが分からない程あなたは馬鹿ではないでしょう」

んがーっ！という唸り声。ジュンハクのものだ。

もう折れる寸前まで追い詰められているというのに、目の前の少女は決してそれをよしとはしない。

「馬鹿はお前だろうが！誰がこんな状況でそんな些細なもん気にするか、ってんだ！」

「だとしても、この話はあなたには関係無いわ」

依然として、彼女は突き放すような態度を止めない。あくまで強がり続けるつもりなのか。

「関係大有りだよ！あんなもん間近で見せられて、見て見ぬ振りが出来るほど俺は馬鹿じゃねえんだよ！」

「でも」

「でももだつても無えよ。……あーっ、なんていうか、アレだアレ！」

次の言葉が見当たらないのか、要領の得ない話にもつれ込みそうになる。しかしすんでの所で検索が間に合った。

ジュンハクはヴァルツの目を真っ直ぐに捉え、真剣な表情のまま言い放つ。言つてのける。

「俺はお前を守りたいんだ。こういう表現が正しいのかなんて俺には分からねえけど、とにかく守りたいんだよ！」

「……え？」

守る。その言葉はジュンハクの中でも最も意味のある言葉だった。彼が軍人になった理由も、これと一字一句違わぬ言葉で言い表す事が出来る。

彼を突き動かす原動力、と言っても良いかもしれない。それ程までに特別な意味を持つ言葉だった。

「ここで待ってる。すぐ戻ってくるから、な？」

初めの内は彼の言葉に対する戸惑いを隠せないヴァルツであったが、やがて理解が追いついたのか、彼女は小さくこくりと頷いた。

「……分かった。ここで待ってる」

「よし。炭酸大丈夫だよな？とりあえず何か買ってくる」

「え、あ……」

ヴァルツの返事を聞くより早く、ジュンハクは近くの自動販売機を探して走り始めた。

自動販売機はすぐに見つかった。五分と経たない内に、ジュンハクはヴァルツが待つ格納庫のベンチに戻ってくる。

「ほらよ。言っとくけど金なんて受け取らないからな」

ぶっきらぼうな言葉を並べながら、ジュンハクは今しがた買ってきた炭酸飲料をヴァルツに投げ渡す。

受け取ったそれをしばらくまじまじと眺めていたヴァルツ。ジュンハクは彼女より先に炭酸飲料を流し込んでいた。

一気に飲み干すかのような勢いでごくごく飲み進めるジュンハク。

ややあつて、ヴァルツもボトルの蓋を開けて口をつける。炭酸の気泡が次々に流れ込んでくる。

「……う、けほ、けほっ！」

どうやら上手く飲み込めなかったらしい、ヴァルツはせりあがってくる二酸化炭素を堰という形で吐き出した。

「おいおい、大丈夫か？」

「……炭酸、苦手」

思わずヴァルツの方を見やるジュンハク。ヴァルツは少し機嫌が悪そうな顔で手の中の炭酸飲料を睨んでいた。

「だったら先に言えよ……」

「言う前に、あんたが走り出したのよ」

何と言っのдарうか、とにかくヴァルツは少々虫の居所が悪い。はあ、と溜め息をついてから彼女の隣に座るジュンハク。

すると、ヴァルツはジュンハクから少し距離を取って座り直した。む、という顔でヴァルツを見るジュンハク。

「言っておくけど、私とあんたの距離はこれよりまだもっと広いんだからね」

「……はいはいそうですか」

言って、ジュンハクはもう一度炭酸飲料の入ったボトルを急激に傾けた。そのまま一気に飲み干す。

「……で。理由くらいは聞かせて貰えるんだろうな？」

真剣な表情で、しかし深刻にならないように気を配って、ジュンハクは問い掛ける。

「……言いたくない」

視線を床に落としたまま、ヴァルツはぽつりと呟く。あくまで秘密を貫くつもりらしい。

だが一度否定されたくらいで簡単に引き下がる程、ジュンハクは諦めの良い人間ではなかった。

「だけどさ」

「聞かれたくない」

もう一度、ヴァルツからの拒絶信号。はあ、という短い溜め息をついた後で、ジュンハクはもう一度疑問をぶつけた。

「じゃあ誰にも吐き出さないまま、理解されないまままで良いって言うのかよ？」

「……そんな事は、言ってない」

「だったら話せよ。俺にどうにか出来る問題じゃないかもしれないけど、それでも話聞いてやるくらいは出来るんだよ」

ジューンハクの台詞からややあつて、ヴァルツはようやく彼の目を捉えた。真っ直ぐな瞳だ、ヴァルツはそう思ったかもしれない。

「分かった……。その代わり、最後までしっかり聞いてよね」

「ああ、勿論だ」

こくりと頷いて肯定の意を示すジューンハク。その姿を見て、またしばらくしてからヴァルツは重たい口を開いた。

「ゲイルローダーが二機で一つの小隊を形成するのは知ってるわね？」

軍学校のパイロット養成所で初めに学んだ知識だ。ジューンハクは黙って頷く。

「私と一緒に出撃したパイロットは、皆その戦闘で死ぬの」

そして重たい口から零れ出た言葉は、またしても重たいものだった。瞳が収縮する。喉を絞められる。

正直、こうなるとは予想出来ていなかった。背筋を駆ける寒気を感じて、自らの覚悟が甘かった事を悔いるジューンハク。

一瞬決意が揺らぎそうになるが、内面で己に喝を入れてなんとか持ち堪える。

「……偶然だろ、そんなの」

ジューンハクは、そんな薄っぺらい言葉を返す事しか出来なかった。情けない、何を言ってるんだ、などと考えるが、既に言葉は放たれた後だった。

「偶然なんかじゃないわ。これまでずっとそうだったもの。きっとこれからもそうよ」

言いながら、ヴァルツの視界はどんどん霞んでいった。涙を浮かべているのだ、という事を、本人は認識していなかった。

「勝手に決めつけんなよ。お前良い腕してんじゃねえか。責任は死んだ奴らの腕が——」

「止めてよ、そんな無意味な慰め。余計自分が惨めになるじゃない」
ここでもう一度ジューンハクはしまった、と己の未熟さを恥じる。
彼女の気を紛らわせる為とはいえ、死んだ人間に責任を転嫁して

しまった。きつと彼女はその言葉を重荷に感じてしまうだろう。

そしてそんな言葉では、決して彼女は心を開かないだろう。それくらいの事はジュンハクにも分かっていた、筈だった。

「だからって許して良いのかよ？あいつらは言っちゃいけねえ事を言いやがった。俺がお前だったら――！」

「もう良いわ。私の話はこれで御終い」

ジュンハクの言葉を最後まで待たずに、ヴァルツは格納庫の外へと歩き出した。

非常に淡白な行動の前に、ジュンハクは待てと声を掛ける事すら出来なかった。

……失敗だ。結局、自分は分不相応なお節介を焼こうとした拳句、余計に彼女の心をえぐってしまった。

手の中のボトルを握り潰す。そしてそのまま金属の壁面に拳をぶつけた。毒を吐き出すように、言い捨てる。

「最低だ、俺」

第一章〜8〜

8

暫く自己嫌悪を続けた後、ジュンハクは艦長室へと足を運んだ。先程と同様の格式高い扉。

その扉の前でジュンハクは一度深呼吸を行い、伝えるべき内容を反芻。軽くノックをしてから艦長室へと足を踏み入れる。

ジュンハクはある決意をもって……

「艦長、頼みがあるん——」

「——はっはっは！君もまだまだ甘いな副長くん！？」

「ええい！だから、このデッキとは相性が悪いと言うに！！」

……もって、いたのだが。彼の声は艦長室の二人の大声に掻き消されてしまう。

見れば、二人は超広い戦艦ファイネリオンの超広い艦長室で遊んでいた。遊んでいたのである。

その光景にデジャヴを覚えるジュンハク。違いがあるとすれば酒臭いか否かという辺りだろう。思わず、目頭が熱くなるのを感じる。

彼の頭の中では頭痛の花が咲き乱れて胞子を撒き散らしていた。

いや、胞子を撒き散らすのは菌類か。閑話休題。

「……おい」

二人が遊んでいるのはカードゲームだった。艦長も副長も、左腕に何やら小型の盾のようなものを装備している。

その盾のような物体にはカードの情報を読み取る装置があり、そこから引き出した情報を基にバトルを行っているらしい。

二人の前方には実際に戦闘を行うクリーチャーだかモンスターだかの映像がホログラムで映し出されていた。画像がとても荒い。

その画像の荒さや装置の古臭さから旧式だという事が見て取れるのだが。

「はあ……もう良いです、もう疲れました。私はもう辞めます」

言って、盾のような物体を腕から外そうとする副長。彼の顔からは疲労というか呆れの色が滲み出ている。

「ええーっ、もう一回やろうよー！次やったら勝てるかもしれないじゃーん？ねえねえー？」

その腕にしがみついて副長の行動を阻害しようとする艦長、アポロ。見た目は子供、だが、中身まで子供のようである。

「おい」

「分かりました。じゃあ私も『あのデッキ』で行きますよ？良いんですね？」

「おい」

「上等！言つとくけど手加減なら——」

「ライ」

「——ってあ痛たたただだ！？」

艦長の台詞が中途半端な所で途切れる。後ろから接近してきたジュンハクがアポロの頭を鷲掴みにしたからだ。

そのままの姿勢で手首を返してアポロの頭をぐるりと横方向に一回転させてこちらに向かせるジュンハク。

無茶苦茶な力で無茶苦茶な動きをさせられた為に、アポロの顔が半泣き状態になる。

「一つ頼みがあるんだが」

「はひい！？」

「ごごごご……」という地響きのような効果音が似合いそうなオーラを纏わせて告げる。

アポロには、そもそも恐らく自らかなぐり捨てているようだが、艦長という役職に就く人間の威厳などどこにも無かった。

「……はあ。何やってんだか」

呆れ顔になってアポロを解放、彼を地上世界に復帰させるジュン

ハク。

アポロはまだ「痛てて……」とか呟いている。こめかみと首を摩りながら、彼はジュンハクに問い掛ける。

「……で、頼みってというのは何だね？」

半泣き状態の為、言葉からどこか弱々しさが感じられる。ジュンハクは否応無しに伝わるその気に溜め息を吐きかけながら。

「俺は明日からゲイルローダーのパイロットになる。それで、俺のパートナーを、ヴァルツェルナライト中尉にして欲しい」

突然の申し出に、艦長は勿論副長までもが頭の上に疑問符を浮かべる。

しかし艦長はようやくアポロは艦長としての役職を思い出したのか、一度事務机に座りなおしてから応える。

「ふむ。通常、ゲイルローダーの小隊編成はパイロット部の部隊長、通称『機動兵器隊長』によって選定されるんだがね」

隊長、という言葉にジュンハクは引つ掛かりを覚えた。確か、レヴ・ロミナスという男が周りの男達にそう呼ばれていた。

そうだ、とジュンハクはもう一つ重要な事を思い出した。艦長にどうしても伝えなければならぬ事があったのだ。

「……その機動兵器隊長、って奴なんだが。あれは駄目だ。修正加えるか他のに変えた方が良い」

思い当たる節があったのだろう、艦長はこくりと小さく頷くとジュンハクに向かってこう返した。

「レヴ・ロミナス中佐の事だね？それなら心配には及ばないよ。彼は明日付けで機動兵器隊長を退任する事になっている」

「何だ、もう知ってたのか。だったら先に言ってくれよ。……そうすりゃあんな目に遭わずに済んだのに」

ぎり、とジュンハクは拳を締める。あんな目、というのは何も自分の身に起こった出来事だけではない。

アポロ艦長は一度瞼を閉じて何かを考えるような素振りをした後、ジュンハクに謝罪する。

「それはすまない事をしたね。何が起きたのかを尋ねるのは無粋かな？」

ああ、と首を縦に振って肯定するジュンハク。

「解任になるってんなら、大方の事情は知ってるんだろ？多分、艦長の想像通りだと思うぜ」

そうか、なるほどね、と短い言葉を吐き出してから、艦長はジュンハクに向き直った。

「パートナーの選別に関しては、新任の機動兵器隊長に申請するべきだね。『彼女』の名前はシュトリーペロナ。階級は少佐。

明日は新人の入隊式と機動兵器隊長交代の式があるけど、今ならぎりぎり時間もあるだろう。行ってくると良い」

「分かった。その、シュトリーペ隊長ってのは何処にいる？」

「今はまだ勤務時間だから、機動兵器部隊の詰め所に居る筈だよ。ああ、第一じゃなくて第二の方だね。位置は分かるかい？」

「途中途中で地図でも見ながら進むさ。それじゃあ俺はそのシュトリーペ隊長ってのに会いに行く。ありがとな」

どういたしまして、というアポロ艦長の声を背中に受けて、ジュンハクは艦長室を後にする。

第一章 9

9

(ここか、第二詰め所ってのは)

ジュンハクは先程辿った第一詰め所とは反対方向に向かって歩を進めた。

金属の壁に囲まれた長々とした廊下で、第二詰め所の看板を見つめる。どうやらここが目的地らしい。

三度、ドアをノックする。応答はすぐに返ってきた。

「所属、階級、氏名をどうぞ」

「ジュンハク、アストロハーツ。明日付けでこの、機動兵器部隊に配属される。階級は少尉」

短いやり取りを済ませると、扉のロックが外れる音がした。

この対応からして、腐敗の温床としてしか機能していないあの第一詰め所とは違っていた。

自然に身が引き締まる思いを感じながら、ジュンハクは開放された扉をくぐる。

「ジュンハク、アストロハーツ少尉ね？艦長から話は伺っているわ。ようこそ、機動兵器部隊第二詰め所へ」

扉を通り抜けてすぐ、ジュンハクの視界には一人の女性が収まった。ジュンハクよりも三つ四つ程年上の少女だ。

とても背が高く、更にはすらりと伸びた背筋が凛とした印象を見る者に与えている。スタイルも良い。

軍服を着ていなければ、そのままモデルだかアイドルだかのオーディションに一発合格する事も難しくないであろう。

それくらいの美人だった。だからという訳ではないが、ジュンハクは一層身が引き締まる思いを覚えた。

「あー、えつと。艦長からは『あまり堅苦しくしなくても良い』って言われたんだけど……あんたには敬語の方が良かったりするの？」

艦長からは許可というかそうするようにとの指示が下りているのだが、一応の礼儀として彼は機動兵器隊長である彼女に尋ねる。

「いいえ、普段通りの対応で結構よ。『普通』ならこういうのは好ましくないだろうけど、色々と『特別』ですからね」

「ああ。俺もまさか軍でこんな会話をするとは思ってなかったんだけど。軍学校でも教えてくれなかったし」

「ふふふ。そうね、それはそうでしょうよ」

何かが可笑しかったのだろうか、シュトリーペは小さく笑った。

ジュンハクは特に気にする事も無く会話を続ける。

「それで、俺の用件なんだけどさ。もう艦長から話は伝わってるのか？」

「ええ。パートナーの申請だったわね」

「今勤務中なんだよな？手続きとか面倒だったり、時間が無かったら後でも良いんだけど」

「そんな事はないわ。申請とその承認自体はとても簡単な事よ。……けれど」

機動兵器隊長という役職からか、それとも彼女本来の話し方なのか、割とシュトリーペはきはきと喋る方だ。

しかし、ここで彼女は次の言葉を言い淀んだ。にわかに、ジュンハクの表情が少し暗くなる。

「……そんな言い方しないでくれよな。あいつは何も悪くねえんだからさ」

「そう、そうね。確かにこの言い方は良くなかったわ。けれど、彼女の戦績を見る限りでは私はあなたを引き止めざるを得ない。

分かるわね？」

機動兵器隊長としての当然の判断であると、暗に語っているかのようだった。しかし彼女の問い掛けに、ジュンハクは即答する。

「分からねえよ。過去は過去だ。今と明日のあいっには何の関係も無い」

余りにもはつきりとした清々しいまでの回答に、シュトリーペはきよとした表情になった。

しかしそれも束の間、シュトリーペは顔を綻ばせて笑い始めた。

「あははは！あなたって面白いのね。それに度胸もあるわ。まるであの人を見ているみたい」

笑われた事に対しては微妙な感情を残しながら、ジュンハクは疑問をぶつける。

「……あの人？」

「ああ、いいえ、こちらの話よ。気にしないで」

気にしないでくれと言われたので、ふうん、と理解したような振りを返しながらジュンハクは先を促す。

「兎に角、俺のパートナーはヴァルツ＝ルナライト中尉にしてくれ」

「了承したわ。手続きは済ませておくから、あなたはヴァルツ中尉に挨拶でもしてきたら？」

「……挨拶、か」

ジュンハクは視線を床に落として、ヴァルツの事を考えた。……今は何もしない方が良さ。ジュンハクはそう判断した。

「あら。ここで思い止まるということは、何か気まずい事情でもあるのかしら？」

「まあ、な。色々あったんだよ」

「……色々？」

そこで会話がストップする。微妙な間が発生して、空気の流動を阻害する。

「……なんだよ？どうかしたのか？」

「もしかして、運命の赤い糸に結ばれた関係だったりするの？」

再び第二詰め所に訪れる微妙な間。悪戯に掻き乱された所為で余計に風通しが悪くなったような感じた。

「……何だその理解不可能な言語？」

「え、あ。いえ、私からすればあなたの方が何なのといった感じなんだけど」

微妙な間の正体は、どうやら相性とか周波数といった言葉で言い表す事が出来るらしい。

艦長や副長の訳の分からない会話とはまた違った何とも言えない空気だが、本質はそう変わらないのかもしれない。閑話休題。

「まあ良いや、とりあえずそういう事で」

その空気に耐えられなかったのか、ジュンハクは一方的に会話を断ち切ってその場を後にする。

立ち去っていく少年の背中を見送りながら、シュトリーペはふとこんな事を呟く。

「運命の赤い糸って表現……もう今では使われていないのかしら。それにしても、あの子とヴァルツの関係って一体……？」

第一章　　10

10

とりあえず自分の用事を済ませたジュンハクは、する事も特に無いので自分に与えられた部屋に戻る事にした。

原因がはつきりしているものからはつきりしないものまで、兎に角様々な疲労感を味わっていたから、でもある。

疲れていたので部屋に戻ったらもう速攻でシャワー浴びてベッドに潜り込もうと考えていた。しかし。

「待ってたよ、ジュン」

その目論見は彼の親友であるブラウに打ち碎かれる事になる。彼は部屋の奥に設けられた居間としてのスペースで仁王立ちしていたジュンハクよりも小柄な身体であるにも拘らず、ブラウは一種の気を周囲に放出していた。恐らくそれは怒気である。

あれ、俺、何か怒られるような事したっけ、と今日一日の行動を振り返るジュンハク。その額には一粒の冷や汗。

「ここで会ったが百年目、だね。まあ座りなよ」

そう言っただけでブラウが指し示すのは畳の敷かれた居間ではなく、硬い金属の床の上だった。

やばい。ジュンハクは長年の付き合いから得られる経験と直感からこの先の行動をシミュレートする。

結果はすぐに弾き出された。これからブラウが取る行動の内容も、完全に予想がついていた。

予想が出来ているにも拘らず、いや出来ているからこそ、ジュンハクは戦慄する。これは、やばい。

指定された通りの場所に正座するジュンハク。硬くて冷たい感触が脚に負担を掛けるが今はそれどころではない。

「大体いつもジュンはそうなんだよいつも他人に対する配慮が足りないっていうかいつもデリカシーが無いのに（中略）それでいて他人に対しては自分にも足りてないものをいつもいつも求めててさあそれってすっごく失礼な事だよねえ（中略）分かってるねえ分かってるねえ本当に分かってる分かる訳無いよねえだってジュンだもんねえ言いたかないけどジュンだもんねえ（中略）もう一回言っておこうかなジュンだもんねえどうしようも無いよねえ分かってる分かってる分かってるよジュンがそんな性格だって事（中略）ところで僕が一体どういった理由で怒ってるかは分かるかな分かるよね分かってなかったらこれと同じ話をもう一回繰り返す」それが彼の怒りの表れなのだろうか、ブラウは侮蔑と卑下と中傷とをたっぷり織り込んだ台詞をいっぺんに吐き出す。

その間ジュンハクは微動だにせず彼の説教を聴いていた。少しでも姿勢を崩せばその分だけ話が延長されるからである。

「……で。何か僕に言う事があるんじゃないのかな？」

そこでようやくジュンハクは言葉を発する権限を得た。これが毎回恒例となっている、説教の終わりの合図なのだ。

「……ごめんなさい」

「反省してる？」

「反省してます」

「本当に？」

「本当です」

「……そう。なら良いんだけど」

と言った所で、ブラウは突っ張っていた肩や肘から力を抜いた。ふっ、という空気の抜ける音。

居間に立っていたブラウは部屋の入り口に向かって歩き出す。その途中でジュンハクはもう一度釘を刺される。

「今度からは人にぶつかったらさっきと同じ言葉をすぐに引っ張り出すように。分かった？」

「……わ、分かりました」

そろそろ脚の痺れが限界に達してきていたジュンハクは回転の良くない舌で返す。ふう、ともう一度溜め息の音。

「あー、なんかどつと疲れた。僕は今から大浴場に行ってくるよ」それは俺の台詞だ、と思いながらも口には出さず、ただ黙ってこくこくと頷くジュンハク。

自動ドアの開く音と閉じる音を聞き終えてから、ジュンハクはようやく硬直状態を解除した。

「……だーっ！あ、脚が……！！」

彼は圧迫と冷氣によって極限まで血の巡りが悪くなっていた脚を氣遣う。

あともう少し話が長かったら、脚が壊死するか精神が毒されるか或いはその両方をいっぺんに味わっていただろう。

兎に角、命拾いした事を素直に喜んでおく事にした。

それから当初の計画通りシャワーを浴びて、ジュンハクはベッドに潜り込む事にした。

「……ふう」

今日一日で色々な事があった。なんだか、どつと疲れた。それでも眠気はやってこない。彼は様々な思考を頭の中で巡らせる。

正式に軍人になる前だというのに、色々と衝撃的なイベントばかりに見舞われた。

艦長室での出来事は彼を混乱させるのに十分過ぎる威力を持っていた。

第一詰め所での一件は彼を大きく失望させて落胆させた。

格納庫での騒動は、何より深く彼の心を、何よりあの少女の心を大きくえぐった。

それに比べれば、先程の長々とした説教はまだマシな部類に入るのだろうか。

……そうでもないかもしれない、とジュンハクは回想する。

これからの事が、少しだけ、それは控えめな表現かもしれない、不安になった。

(……それでも)

ジュンハクは拳を握り締めて、胸に当てる。辛い時や自信を失いそうになった時、そんな時彼が呟くその言葉は。

「守るんだ。父さんや母さんを。俺が皆を、俺が地球を守るんだ」
それは、今はまだ、ちっぽけな少年の誓いだった。

第二章　死なないでね

第二章　死なないでね

1

「……ここは」

黒。視界を塗り潰す色。黒。少年を塗り潰す色。黒。光の無い色。黒。この宇宙の色。

宇宙の色だと分かっているものの、星の輝きが見られないことから、ここが『この宇宙』ではない事を知る。

上も下も前も後ろも右も左も無い世界。方角はおろか自分すらも見失ってしまいそんな世界。

少年はこの光景に見覚えがあった。というより、彼は割合頻繁にこの世界にやってくる事を自覚している。

「……また、同じ夢か」

そう、ここは少年の夢の世界なのである。彼がぼつりと呟くと、目の前の空間が急激に収縮していくのが分かった。

無限に広がっていた黒の世界は突如として何者かに囚われ、凝縮されて圧縮されていく。

外界の視点に立つのであれば、閉じた宇宙のその淵が、まるで空気の抜けたボールのようにしぼんでいく、ようにも見える。

しかしボールの内容物はどこかに発散していく訳ではなく、逆に、異界から新たな物質を吸収しているかのようである。

増大する質量。極限の密度。全てが混ざり合い形を失って存在意義が抹消されていく。

無論少年とて例外ではない。腕も脚も胴体も、魂ですらも、全てが混ざり合った世界に溶け込んでいく。

暫くの静寂。そもそもこの世界に音というものが存在していたかどうかすら疑わしくなる程の、長い沈黙。そして。

『やあ』

再び音の生まれた世界で、少年は声を聞く。それは先程までの黒の世界同様、彼にとって聞き慣れた声だった。

その言葉がきつかけとなったのだろうか、世界には、それまで存在していなかった要素、概念が雪崩のように押し寄せてきた。

にわかには形を取り戻す世界。しかし、それは少年が良く知った世界とはどこか位相のずれた、異界とも呼べる世界であった。

入れ物を失った魂が再構築される。やってくるのはしもやけを起こした身体を急激に暖めた時のような、全身を襲う痺れ。

「んで。また『お前』が出てくる訳だ」

少年は毎度毎度繰り返される予定調和に、溜め息をつきながら応えた。

目の前に何かが居る訳ではない。目を凝らしてもそこに広がるのは一面の黒だけだ。

しかし少年は、この空間に居るのかどうかすらも分からない存在の声を聞き、それに反応した。

人間には見えない周波数の光。人間には聞こえない周波数の音。観測不可能領域。絶対の不可思議。

それは夢という現象のみが持ちえる稀有で奇妙な特性ではあるが、逆に言えば万人がその不可思議に遭遇しているとも言える。

そして人々は何の疑問も持たずにそれを受け入れる。それはありふれた不可思議。

『今日は私だけではない』

少年の見る夢もそういった不可思議の一つだ、と、少なくとも少年はそう考えている。

何処かに居るその存在が語り掛けてくる、なんていう夢にももは

や疑問を抱かなくなっていた。のだが。

「他に誰か居るのか？」

今日この日に見た夢だけは、何かが少し違っていた。夢の中の自分が、疑問符をぶつける。

今まで少年の夢に出てきた存在は確か、単体だった筈だ。他の何かを引き連れてくるというのは、初めてだった。

真っ黒の空間に、真っ黒の人影が現れる。

相も変わらずそれは見える筈の無い光であったが、何故か少年はそれが人間のシルエットであるという事を理解していた。

数は八つ。声が聞こえる訳ではないのだが、やけに賑やかになったな、と少年は率直な感想を漏らす。

『と言つても、この内の何人かは既に出会った事のある人物だと思うのだがね』

言われてみれば、確かに、少年はその人影に見覚えがあった。といつても、それが誰であるのかは一向に思い出せない。

「いつもと違うパターンの夢だな。何かあったのか？」

少年の問い掛けに、目には見えない存在は唇をにやりと曲げた。

明確な根拠は無いが、少年にはそれが分かつていた。

『今日は記念すべき特別な日だからね』

記念？ 特別？ 夢の中の少年はその単語について思案するが、そうこうしている内に、夢の終わりが訪れた。

視界が白んでいく。閉じた宇宙と、八つの人影と、目には見えない存在が全てその白に飲み込まれていく。

今回もまた、この夢は少年に謎と疑問を残すだけの、誰もが見るような、意味の無い夢だった。そう、少年は思った。

「……い。ジュン？ 早く起きなよー」

「……ん。ブラウ、か？」

夢が終わって、現実が始まる。ジュンハクは寝ぼけ眼を何度かこすって、その先に親友であるブラウの姿を発見した。

見れば、ブラウは既に普段着から軍服に着替えていた。しっかり

と整った服が、ジュンハクにこの後の出来事を思い出させた。

「そうか、今日は俺達の入隊式だったな」

「今の今まで忘れてたの？相変わらず時間にルーズなんだからさ、ジュンは」

わりいわりい、と気の抜けた返事を返して、大きな欠伸をするジュンハク。とりあえずベッドから起き上がる。

「……あれ。トラ……なんとか、って人と何とかールって人は？」

部屋を見回す。確かこの部屋は四人部屋の筈で、自分達の他にも人間が居た筈だ。ブラウは額に手を当てて呆れながら返す。

「昨日説明したじゃん。トライク少佐とルヴェール少佐。二人は式の準備やら何やら忙しいから、先に部屋を出たんだよ」

そうなのか、と呟いて、ジュンハクは寝間着を脱いで軍服に手を掛ける。

その途中でブラウは部屋の出口へ向かって歩き出した。

「僕も急いでるから、先に行ってるね。道は分かるでしょ？」

「ああ。っていうか、迷いようが無えよ」

そう、じゃあまた、というブラウの声を聞いた後で、ジュンハクは洗面台に向かって歩き始めた。遅れて、ドアの開閉する音。

何とは無しに、鏡を見る。そこに映っているのは勿論自分の姿。

ただ、自分の表情が予定とは少し違っていた。

鏡の中の自分は、どこか不安げな表情を浮かべていたのだ。

(……何をそんなに心配してるんだ。何も不安な事なんて無いんだ。俺はやっと軍人になれたんだ。父さんや母さんを、地球を守るんだ) ぱし！と勢い良く両頬を左右それぞれの手ではたいて自分に喝を入れる。少しだけ元気が出てきた、ように思える。

それから手早い動きで軍服に身を包み身だしなみを整えて、部屋を後にする。

がしゃ、というオートロックの音に見送られ、ジュンハクは入隊式の会場に向けて歩き出した。

第二章 2

2

「――宣誓！我々はこれよりこの軍服に袖を通し」

新入隊員代表の青年が、声を張り上げるようにして文章を読み上げる。

入隊式の会場はファイネリオン内部の居住ブロックにある広場で執り行われていた。

広場、といってもそこは超弩級戦艦ファイネリオン。頭に超弩級の名がつくほど広大な敷地を利用している。

式典に参加している人数は、ゆうに一万人を超えているだろう。

内、新入隊員はその一割にも満たない。四割程が現役の軍人。残りは軍部との関わりが強い企業の間人や隊員の知人だった。

それら大勢の人間が集まる式の中にジュンハクは居た。

しかし、初めて軍服に袖を通した昨日のような気分ではない。

彼は心ここにあらずといった様子で、厳粛なムードで執り行われる式の様子を見ている。

（大丈夫だ。何も心配は要らない。俺は間違った道になんか進んでない）

まるで、というよりそのまま自分に言い聞かせるようにして心の中で念じるジュンハク。

そんな事を考えている間にも式は進行する。新入隊員代表が最後の口上を述べた。

次は現職軍人からの返礼。

軍部の実態を知ったジュンハクからすれば白々しいにも程がある、砕けた言い方をすればお堅い、規律の話。

きつと腐敗の温床に住まう彼らにとって、如何に笑いを堪える

かという事が肝となる話であろう。

ジュンハクは彼らを囲む形で立ち並んでいる現職の軍人達に目を向ける。

そこにはつい先日第一詰め所で遭遇した男達も出席していた。

ジュンハクにとつては後になってから知った話だが、怠惰の海に沈んだ彼らも流石にこの手の儀式には参加せざるを得なかったようだ。

中にはヴァルツの事を死神女と呼んだ男の姿もあった。ジュンハクはそれを見つけて齒噛みする。

（俺はあいつらとは違う）

頭の中で浮かぶ昨日の出来事を反芻する。拳が自然に硬く握られた。

（守るべきものを持つ者と持たない者の違いを教えてやる。今に見てる。俺は必ず、皆を守ってみせる）

目の前で行われた新入隊員のそれとは違う、ジュンハク独自の誓約。締めた拳を一度開き、もう一度握る。

「次に、機動兵器隊長交代の儀を行う」

その声で、ジュンハクの頭が切り替わった。どういう訳か、やけにはつきりと聞こえる声だった。

壇上に設けられた椅子から立ち上がる一人の男。今まで気が付かなかったが、そこには見覚えのある、忘れようの無い顔の男が居た。レヴ・ロミナス。階級は中佐。今は無精髭を剃り落とし、軍服をしつかりと着こなしていた。先日の彼とはまるで別人である。

そして今この瞬間まで、機動兵器隊長の座に胡坐を掻いていた男、というのがジュンハクの脳で精製され蓄積された情報である。

敵対心すら感じさせる目つきで現・機動兵器隊長を睨みつけるジュンハク。

睨まれた本人がそれに気付く気配が無いのも、当然といえば当然だろう。

彼の目は次代の機動兵器隊長である人物の顔を捉えていた。ジュ

ンハクより二、三歳程年上の少女。

名前は確かシュトリーペと言ったか。そこまで考えた辺りで、儀式は終了した。

腕時計を確認する。一瞬の出来事のように感じたが、実際にはそれなりの時間が経過していた。

この儀式の後には現、新含む他の隊員との対面式が予定されていた。対面式はこの公園とは別の場所、軍司令部で行われるらしい。周囲の新人隊員達が足並みを揃えて、式の会場となった公園を後にする。

ジュンハクは清々しい青空を見上げる。スクリーンに投影された映像であり、人為的に操作された天候である。

それが分かっているにしても清々しいと感じられるのは、単に技術が進歩しているだけ、という訳ではないようだ。

（あのおっさんはもう隊長でもなんでもないんだ。シュトリーペ隊長なら、なんとかしてくれる）

第二章 3

3

入隊式の後に行われた対面式の会場は、広大な軍司令部の中の一施設である食堂で行われた。

人数の割合としては入隊式とは対照的に、新入隊員の方が圧倒的に多い。

右を見ても左を見ても、まだ軍に馴染んでいない様子の、明らかに新入りだらけだった。

全員参加という訳ではないのだろう、食堂内には先輩というより上官と呼ぶべきである人間の数は少なかった。

レヴ・ロミナスやその取り巻きの男達と遭遇する心配が無いので、ジュンハクはひと安心する。

今頃彼らは軍服を乱雑に脱ぎ散らかして第一詰め所辺りでだらだらとしているのだろう、というのはジュンハクの想像だった。

「よお。お前、新入りだろ？」

と、横合いからの声。ジュンハクが振り返ると、そこには見知らぬ男の姿があった。手を挙げているのは、挨拶のつもりなのだろう。歳は僅かばかりジュンハクより上で、身長はジュンハクよりも顔一個分くらい高い。

「そうだけど、それがどうかしたのか？」

何の気無しに返すジュンハク。しかし、目の前の男の表情はその一言で険しいものになった。

「何だよ、俺に何か用事でもあるのか？」

「お、おいおいお前……。上官に対してその口ぶりは無えだろうよ？」

「？」

何かおかしい事を言っただろうか、とジュンハクは自分の言葉を反芻する。だが、おかしい点を発見する事は出来なかった。

ファイネリオン艦長であるアポロの言葉によれば、確かここでの言葉遣いはこれで正しかった筈だ。

「何かおかしいか？……ああ、名前くらい名乗れ、ってか。俺の名前は……」

目の前の男は明らかに気分を害した顔でジュンハクを睨んでくる。生まれつき目つきが悪いのか？と見当違いの疑問を抱くジュンハク。

「てめえ、ふざけてんのか？それとも只のアホなのか？」

「誰がアホだよ。いきなり喧嘩腰になられても困るんだけどさ」あくまで落ち着いた様子で言葉を放つジュンハクに、男は拳を硬く締める。周囲がにわかにざわめき出す。

血の気の多い奴だな、まさかこんな所で鬭り合うつもりなのか？と考えながらそれに応じる姿勢を整えるジュンハク。

「ゲルブ」ギーリヒ中尉！何をしている！」

誰かの名前が呼ばれた。恐らくジュンハクの目の前に居る人物の名前だろう。変な名前だな、と率直な感想を持つジュンハク。

声は女性のものだ。聞き覚えのある声だった。誰の声であるかは、音のした方向を振り向けばすぐに分かった。

「隊長！」

ゲルブと呼ばれた男もジュンハクに遅れて振り返る。その顔には少しの焦りの色が見て取れた。

「隊長、聞いて下さいよ！この新入り——」

「問答無用っ！」

「——ぶがつ！？」

何事かを喋る前に、ゲルブ「ギーリヒは隊長、シュトリーペに側頭部を思い切りぶん殴られた。

二、三メートル程ぶっ飛んで床に身を投げ出す。机等は片付けられているので、それらの角で頭をぶつける事は無かったようだ。

が、本人はもとより周囲の人間までもが思わずうわあ、と動揺す

る程痛そうなパンチだった。

実際、相当痛かったのだろう。ゲルブという男は床に倒れこんだまま、動く気配が無い。

「え。……え。な、何、何が起きたんだ？」

思わずしどろもどろになるジュンハク。新・機動兵器隊長シュトリペはにつこり笑顔になってそれに応える。笑顔が逆に怖い。

「ごめんなさいね、部下の躰不足だわ。何処にも怪我は無い？」

「え、ああ、はい、……なんともない、です」

彼にしては珍しく敬語を使う。大の男を二、三メートルも吹っ飛ばすパンチを間近で見せられたら、まあ当然の反応と言えるだろう。シュトリペ隊長はジュンハクに対するそれとはがらりと印象を変えた口調で周囲の新人隊員に号を飛ばす。

「あー、新人隊員の諸君！貴様らはこれからこの軍でそれぞれの任務に就く事になる訳だが、勘違いはしないように！

このような馬鹿者が現れた場合には、即刻鉄拳による制裁が加えられるという事を留意する事！以上、解散！」

余りにも強引で無理矢理な締め方で決着させた機動兵器隊長、シュトリペ。食堂内の空気がぐにやりと歪んで淀む。

なんとも言えない哀愁を漂わせるずっとという音を引き連れて、こつこつという硬い足音が出入り口に向かう。

新任隊長の恐ろしさを目の当たりにした隊員達が、黙祷のようにも見える沈黙でそれを見送る。

（……なんか知らんが、気の毒な奴）

ジュンハクも思わず合掌。次に目を開けた時には、目の前にはブラウが立っていた。なんだか複雑そうな表情でジュンを見ている。

「ジュン。僕は君の生き方にあれこれ口出しするつもりは無いんだけどさ、とりあえず、所構わず喧嘩吹っ掛ける癖止めなよ」

「いやいや、どう考えても、先に仕掛けてきたのはあっちだろうが」「相手の人もお気の毒に。ジュンに関わったばかりにあんな事になるなんて」

「お前は俺の何を見てるんだ？」

友人を思つての一言なのかそれともただ単に馬鹿にしているのか
分かりづらい言葉で諭すブラウ。

こういったいざこざが起きる度にブラウとはこんなやり取りを行
っているの、今更どうこう言つつもりもないジュンハク。

しかしその手慣れた感が、彼がしょっちゅうこういった出来事に
遭遇している証でもあったりするのだが。

「それにしても今の人、凄かったねえ。あの人がジュンの所の隊長
さんなんだ」

「ああ、末恐ろしい事にな。俺も気をつけ――、！」

ブラウとの会話中に、何かを見つけたジュンハク。視界の隅を注
視すると、そこには昨日出会った少女の姿があった。

「ヴァルツ！」

ジュンハクは思わず会話を中断して、少女の元へと駆け出す。

少女、ヴァルツ。ルナライト中尉はあからさまに不機嫌そうな表
情でこちらを睨んでいた。

名前を呼ばれた事が腹立たしいのかそれとも別の原因があるのか。
とにかく、ジュンハクは彼女とのコンタクトを図ろうとする。

「名前で呼ぶの、止めなさいよね」

先に会話を始めたのはヴァルツの方だった。

やはり指摘するのはジュンハクが彼女を名前で呼び捨てにした事
だが、どうやら他にもまだ何かあるらしい。

「そりゃ悪かったな。今度から気をつけるよ、ヴァルツ中尉」

呼び捨てにするのは止めたジュンハク。

それでも気に入っていない名前で呼ばれた事は不機嫌の一端を担
っているのだろうか、ヴァルツの表情は険しい。

「上官に対する態度がなっていないわね。あなたも鉄拳制裁を喰ら
つてくる？」

勘弁してくれ、というニュアンスのジェスチャーで応じるジュン
ハク。

「隊長から聞いたわ。あなた、どういふつもり？」

何がどういふつもりなのかなど、言葉にしなくても分かりきった事だった。

無論、何故自分をパートナーに選んだのか、という話題なのだろう。なので、ジュンハクはその説明を省略する事にした。

「どういふつもり、とはまた随分な言い方だな。これから肩を並べて戦う『仲間』なんだからさ」

彼の言葉のどこかの部分で、ヴァルツは目を吊り上げ更に強く彼を睨みつける。

余程納得がいかないのだろう、彼女は口を尖らせてより不機嫌である事をアピールしだした。

すると、ジュンハクの後ろの方に居たブラウが心配そうな顔でジュンハクの隣に立った。

「ジュン、また喧嘩？」

素でそう尋ねてきたブラウに対して、ジュンハクは手の平をひらひらと振ってなんでもないと示した。

「ゲイルローダーのパイロットが二人一組なのは知ってるだろう？だからパートナーを組もう、って言う——」

「はいはいそりゃ相手も怒るよね」

「——待て、俺の何がいけないんだ!？」

ブラウが現れた事によつてぎゃあぎゃあと騒ぎ出した彼らを見て、ヴァルツは思わず頭を抱える。

頭を抱えたまま、彼女はシュトリーペが向かったのと同じ出入り口へと歩き出した。

五歩程進んだ所で、彼女はジュンハクに呼び止められる。

「お、おい待てよ。まだ話してない事が……」

「言わなくても分かっているわ。あなたが馬鹿だつて事くらいね」
「なんだと、という言葉は喉の奥でぎりぎり押し留めて、ジュンハクは言う。」

「死ぬなよ。何があつても、絶対に死ぬんじゃないぞ」

「……それはこっちの台詞だわ」

振り返りもしないまま応えて、ヴァルツは新入隊員対面式の会場である食堂を後にする。

ジュンハクとブラウの二人はその様子を暫く眺めていたが、そこでジュンハクはブラウの顔が妙ににやけている事に気が付く。

「……何か面白い事でもあったのか？」

「別にいいやあ、ジュンはやっぱり面白いなあ、と思ってさあ？」
やたらと語尾が間延びしていたり意味不明な疑問符が混じっていたりしたが、ジュンハクは大して気にしなかった。

というより。

「よう。生意気な新入りのガキ」

他に対処しなければならぬ問題が発生した。見れば、そこにはだらしなく前の開いた軍服を着た男、レヴが立っているではないか。その他にも彼の取り巻きと見える、ごろつき風の男が六人も居た。彼らも軍服を三者三様に着崩している。

厳しい規律に縛られた（筈である）軍の中、ある意味異様とも言える雰囲気を纏った男達の登場に、新入隊員がざわめきだす。

ジュンハクは明らかに気分を害した表情でレヴの顔を見ていた。隣に居るブラウはそんなジュンハクを見て一言。

「……また喧嘩？」

「そんなんじゃないよ。……ただの喧嘩よりもっと質が悪い」

言いながら、ジュンハクは自然に拳を締めていた。それを見たブラウはただならぬ事態である事に気が付く。

「そう緊張すんなよ。ああ、もしかしてビビッてんのか？」

へらへらと笑うレヴの顔は少し赤い。息もアルコールの成分を含んでいる。

機動兵器隊長交代の儀からまだ一時間程しか経過していないというのに、もう酒が入っているらしい。

この駄目人間め、と心の中で呟いてからジュンハクは応じる。

「脚がふらついてるぜ。なんならドクターでも呼んでこようか？」

「へっ。医者なら間に合ってたよ。なあ？」

レヴが後ろを振り返ると、彼についてきた六人の男達が頷く。知り合いに医者でも居るのだろうか。

「そうかよ。で、元・機動兵器隊長様が俺達新入りに何の御用で？」

「お前達に忠告しにきた」

別段ふざけた様子も無く、レヴは言う。忠告？ジュンハクをはじめとした多くの新入隊員が眉を寄せ疑問符を浮かべる。

レヴは大仰そうに両腕を開いて、まるで演説を行う君主のように語り始める。

「いいかあ、お前ら！人生の先輩からのアドバイスだ、しっかり聞いとけよお！？まず第一に！この軍を信じるな。ここにいる奴らは皆体の良い言葉ばかり並べてお前らに近付いてくるが、それは罠だ。裏じゃあどんな事を考えているか分かったもんじゃねえ。絶対に信用するんじゃねえぞ」

第二に、という声が聞こえる前に、ジュンハクはレヴに飛び掛かろうとする。が、途中で取り巻きの男達に行動を阻害された。

「てめえ、勝手な事言ってるじゃ……！この、放せっ！」

「騒ぐんじゃねえよ、ガキが。大人しく隊長の話を聞いてろ、ってんだ！」

辛うじて言葉を発するジュンハクだが、レヴの話を止めるには至らない。取り巻きの男達がジュンハクを押さえに掛かる。

隊長、と呼ばれたレヴは一瞬だけ眉を潜めたが、気にせず話を続けた。

「第二に！お前らに下される命令も嘘っぱちだ。死にたくなかったら命令には絶対に従わないように。第三に！お前らが上の連中から守れと言われているもの、お前らが守ろうとしているものは全部まやかした。特に、『地球を守るんだ』とかっていう馬鹿げた事を言ってる奴は、悪い事は言わねえからとっとと一般人に戻れ。良いな？」
彼の言葉は、右も左も分からない新入隊員達を混乱させるのに十分過ぎる威力を持っていた。

どよどよと、今日入隊したばかりの新入りからはざわめき声が聞こえる。

真に受ける者は殆ど居なかったが、真っ向から否定する材料も持っていない為、完全否定は出来ない。

半信半疑のまま、ただ周りの者と顔を見合わせるのが精一杯だった。

ただ一人ジュンハクだけが、レヴの言葉を否定しようとする。

「事実無根の間違った認識を植えつけるのは止めて頂きましょうか、ロミナス中佐」

だがその声は自分を拘束する男の手と、新たに現れた人物の声によつて掻き消された。

この場に居る全員が、声のした方向を振り返る。食堂の出入り口そこにはすらりと背の伸びた少年と、彼の部下であると思われる複数の兵士が居た。彼らの手には警棒が握られている。

物々しい雰囲気を纏った兵士達が、すぐさまレヴやその取り巻きの男達を包囲した。訓練された兵士の、迅速な行動だった。

その結果として、ジュンハクの拘束が解除される。

「なんだ、またてめえかよ。毎度毎度計ったようなタイミングで現れやがって」

舌打ちを交えながら、レヴは複数の兵士を引き連れた少年、グリーネに向かって悪態をつく。

「大人しくしてくれればわざわざ貴方の目の前に現れたりしませんよ」

「へっ、違いねえ」

グリーネは感情の起伏が感じられない声でその悪態を撥ね退ける。応じるレヴに、大した異論は無いようだ。

連れて行け、というグリーネの一言で、兵士達はレヴや残りの六人を何処かへと誘導する。

彼らが全員食堂から出た後で、グリーネは困惑の最中にある新人達に号令を飛ばす。

「貴様達は何も見なかった！何も聞かなかった！我が軍は太陽系の、ひいてはこの宇宙の絶対的正義である！秩序を乱さず命令に従い、守るべきものを守る。それが我らの使命だ。ゆめゆめ忘れぬように！」

グリューネの言葉で、少しは動揺が収まったようだ。周囲のざわめきが沈静化する。

それを確認する間も無く、グリューネは足早に食堂を後にした。他に何か用事があるのだろうか。

拘束が解かれたジュンハクは、思わず隣に立つブラウに話し掛ける。

「……お前の兄貴、やつばすげえな」

なんの気無しに放った言葉であったが、ブラウからの応答は一分程遅れて返ってきた。

「……うん。そう、だね」

「？」

その微妙な間に小さな疑問符を浮かべるジュンハク。何かあったのか、と質問しようとした、その時だった。

『敵機接近！敵機接近！第二種戦闘配備！繰り返す！敵機接近、敵機接近！第二種戦闘配備！』

天井に設置されたランプが赤い光を辺りに撒き散らしながら、けたたましいアラートを鳴らす。

戦闘開始直前の合図。それに合わせて食堂内が再びざわめき始めた。

「総員、持ち場に着け！パイロットは格納庫へ、それ以外の者は我々についてブリッジへ！」

その場に居た上官が指示を飛ばす。突然の出来事に慌てながらもなんとか命令の内容を理解する新人隊員達。

「ブラウ！」

ジュンハクはブラウの顔を見る。その顔には他の隊員のような迷いは見えなかった。

「分かってる！ジュンこそ気を付けて！」

言って、ブラウは先程指示を飛ばした上官に従って、ブリッジへと駆け出す。

それを見送ってから、ジュンハクも格納庫へと走り出そうとした。しかし他の新人パイロット達の動きが悪い。混乱していたり、携帯端末で地図と現在位置を確認しようとしている。

ジュンハクは思わず叫んだ。

「格納庫はこっちだ！皆、急ぐぞ！」

第二章 4

4

ジュンハクと、彼に牽引されてきたパイロット達が格納庫に到着した。

が、引き連れてきたパイロット達の存在はどうやら無駄に終わっていたらしい。

配属されたばかりでパートナーとなるパイロットがまだ決定していないのだ。

超弩級戦艦ファイネリオンの主要戦闘機ゲイルローダーは、超弩級の名に恥じぬ高いスペックを誇っている。

火力、機動力は元より装甲の厚さや索敵性能、操縦性から緊急時におけるパイロットの生存確率まで、全てが高い水準にある。

その為、この戦闘機は一つの小隊に必要な機体の数が極端に少なくて済むという利点を手に入れた。

たったの二機で、この機体は戦闘において他の航空・宇宙機を圧倒するだけの力を保有している。

しかし逆を取れば、そこまで高性能に改良された機体であっても単独での戦闘行為は危険なのだ。

他の戦闘機で他の編成を繰り返し繰り返し実験を重ね、最も戦術的に有効な編成が、ゲイルローダー二機による一組の小隊。

この辺りが技術的な限界点であり、また搭乗するパイロットにとっても最適なラインなのだ、と軍学校の指導者は説いていた。

(他のパイロット達は動けない。俺がやるしかないってか)

そんな中、昨日の段階でパートナーが決定していたジュンハクだけが例外的に今回の作戦への参加が許された。

拳を胸に当て、自分が他の人間を守るんだ、と胸の内を決心する

ジュンハク。

手早くパイロットスーツに着替え、ヘルメットを被る。エアールが漏れ出ていないかの確認は、忘れていた。

今はそれどころではないと判断し、急ぎゲイルローダーに乗り込み、通信回線を開く。

「ヴァルツ、……中尉！もう準備出来てるか！？」

呼び捨てにしそうになったところでなんとか階級を間に合わせ、確認を取ろうとするジュンハク。応答は即座に返ってきた。

「当たり前でしょ。あなたの方こそどうなの？」

「俺ももう終わってる！いつでも出撃出来るぞ」

各種兵装、スラスタールやセンサーの調子がオールグリーンである事を確認するジュンハク。

操縦桿を手に取る。パイロットスーツの中の手を濡らす、緊張の汗。背筋を冷たいものが通り抜ける。

（ああ、もしかしてビビッてんのか？）

つい先程交わした会話が脳内で勝手に再生される。ぎり、と奥歯を噛み締める音。

実際、その言葉は半分程度当たっていた。ジュンハクはそれを認めたくなくて、必死に抵抗する。

操縦桿を握る手に更なる力を送り込む。その力みが彼の心を奮い立たせた、のかどうかは分からない。

『敵機の更なる接近を確認！本艦は只今を持って第一種戦闘配備に移行する！』

繰り返す、という言葉の後に同じ文章がもう一度読み上げられる。

——第一種戦闘配備。つまり、それは一人の兵士として戦場に出撃する事が決定した証。

物々しい雰囲気と共に、メカニクと思しき人工知能搭載型のマシンが慌しく走り回る。

戦場。喉の奥がひりつく。戦場。手の震えが収まらない。戦場。悪魔に魂を差し出す感覚。

（ビビってるんじゃない、武者震いしてるんだよ！）

それら全てを拭い去ろうと、ジュンハクは心の中で自分に喝を入れる。視界が少しだけクリアになったように感じられた。

『ゲイルローダーをカタパルトにセット。一分後より順次出撃してください！』

オペレーターの女性の声。その声で、ジュンハクの神経が更に鋭く尖る。後一分。心の用意をするには不十分な時間。

格納庫の床面が開き、そこからベルトコンベアが顔を覗かせる。機体が固定され、次に前方の壁面が割れていく。

そこには出撃の際に初期加速を行う為のカタパルトが存在していた。それはジュンハクを戦へと駆り立てる装置。

オペレーターの指示通り、カタパルトにゲイルローダー本体がセツトされる。

ジュンハクは前方の壁を凝視する。この隔壁の向こうには、宇宙空間が、戦場が広がっている。

そこはジュンハクにとって未知の領域。何が起こるか予測出来ないし、安全が保障されている訳でもない。しかし。

『アストロハーツ少尉』

「……ん？」

『死なないでね』

ヴァルツ＝ルナライト中尉のその呟きが、ジュンハクの心にもう一度闘志を湧き上がらせた。

今度こそ確実に、操縦桿を握るジュンハクの手の震えが収まった。

（何を怖がる必要がある。俺は自分の使命を果たしに行くんじゃないか。こんな事でがたがた言ってるじゃねえよ！）

モニターに表示される『READY?』の文字。ジュンハクは迷い無くコンソールのキーを叩く。

（守るんだよ、皆が暮らすこの艦を、仲間を！）

ここに、少年の戦いが幕を開けた。

「……ぐううっ……！」

ゲイルローダーに接続したカタパルトが、コックピットのモニターに『GOODLUCK』と示した。

だがジュンハクにそれを視認する余裕は無かった。電磁式のカタパルトによって、機体が急加速を迫られたからである。

全身を襲う強力なG。強烈な圧迫感に、思わず吐き気が込み上がる。なんとか押し戻した。

「はあっ、はあっ……！」

初期加速を終えて機体が安定航行に入る。それと同時に、パイロットスーツの胸部に当たる部位が点滅した。

スーツに備わった生命維持装置の一つだ。ジュンハクの脈拍が変化した事をセンサーが感知したらしい。

すぐさま、精神安定剤の役目を担う薬液がジュンハクの頸部に塗布される。

『ゲイルローダーの航行速度が半端じゃないのは知ってたでしょ。』

この程度で動揺しないで『

通信機から聞こえてくる、ヴァルツの冷たい声。

「へっ。上等等……っ！」

その声に僅かばかりの活力を貰って、ジュンハクはなんとか重たい頭をもたげ、目の前の出来事に集中する。

「――、」

彼の視界を、宇宙という領域が支配する。

真っ黒の空間に浮かぶ無数の星々。その間を埋め尽くす、またも真っ黒の空間。そしてまた、星、星、星。

あまりにも広大で、あまりにも雄大な景色。目に映るのは様々な色の光と単色の闇。

この世界を創造した者を神と呼ぶのならば、まさしく神の造り出した夢幻の絵画。これ以上の言葉は存在しない。

少なくとも、実際に宇宙に出た事の無いものにとっては。

「これが……宇宙」

ジュンハクは思わず呟いていた。

今まで何度か宇宙空間を垣間見る機会があったものの、実際に宇宙空間に放り出されたのはこれが初めてだ。

その感動は言葉では到底言い表せないし、ジュンハクにはそれだけの余裕が無かった。

『いつまでぼーっとしてるつもり？もう戦闘は始まっているわよ！』
ヴァルツの声で再び視界が色彩を取り戻す。目の前のモニターの隅に表示される広域レーダーに映る、無数の敵影。そう、敵影である。

ジュンハクは再確認する。ここが戦場で、自分は一人の兵士なのだ、と。

（そうだ、何をぼーっとしてやがる。目の前の敵を倒すのが俺の任務じゃないか！）

頭を振って雑念を振り払う。パイロットスーツの空調機能をいじって、冷たい風を送る。思考をよりシャープなものに切り替える。

ジュンハクはゲイルローダーのエンジンを吹かして、まだ見ぬ敵を探し航行速度を上げる。レーダーが示す敵影まで一直線に、だ。

その動きを察知したヴァルツが、新入りの無謀な行動を見て叫ぶ
『ちよつと、飛ばし過ぎよ！少しは考えて行動しなさい！』

「うおおおおおー！！」

制止を求めるヴァルツの声を無視して、ジュンハクはただ雄叫びを上げる。

高い機動力を誇るゲイルローダーが一気に加速する。

しかし、両翼に備えられたスラスタは殆ど炎を燃え上がらせない。

高機動戦闘機ゲイルローダーの推進システムは、ロケットエンジンのみに頼っている訳ではない。

ゲイルローダーは超弩級戦艦ファイネリオンから発せられる磁気嵐に乗って移動しているのだ。

技術は遙か彼方の時間から数段も数十段も進歩しているが、基本の原理はリニアモーターカーと同じだ。

（『道』は良い感じに伸びてる！これなら敵まで一直線だぜ！）
その磁気嵐をセンサーによって捕捉し、光学的な処理を踏まえて
モニターに『道』として表示する。

パイロットはその道に自らの機体を乗せて宇宙空間を移動するの
だ。

また、戦闘機がその磁気嵐を通り抜ける力を利用して、ゲイルロ
ーダー本体の電力事情もいっぺんに解決されている。

これにより、ファイネリオンの周囲であればほぼ無限に作戦時間
を引き伸ばす事に成功している。

だが。

「――！？」

がくん、といういきなりの衝撃。加速状態にあったジュンハクの
身体が前方につんのめる。

シートベルトに圧迫されて咳き込むが、今重要なのはそこではな
かった。

機体のスピードが目に見えて低下していた。先程の加速時と比較
すれば、それは停止しているようにも見える程だ。

まさか、と思い全天式のモニターを身体毎捻って見渡す。

気が付けば、ファイネリオンの示す『道』から大きく外れてしま
っていた。

そこでジュンハクはもう一度、まさか、と我が目を疑った。

先程まで真っ直ぐ伸びていた筈の磁気嵐が、突然姿を変えていた
のだ。

磁気嵐が指し示す道はいつの間にか蛇行していて、ジュンハクは
その蛇の身体と身体の間に分れ込んでしまっていた。

「くっ、だったらもう一度道に乗り直せば！」

ジュンハクは第二の動力として存在しているロケットエンジンを
起動させる。

翼のスラスタが初めて炎を吐き出して、今までとは異なる挙動
で機体を動かし始める。

「うつ、うわあああああ!？」

思わず叫び声をあげるジュンハク。ロケットエンジンによる飛行は、これが初めてという訳ではない。

初めの内は何度も何度も磁気嵐の道から外れて、よく教官に注意されていたものだった。

しかしシミュレーターに慣れた、いや、過ぎた所為でいつしかジュンハクはロケットエンジンによる航行法を忘れてしまっていた。

それに付け加えて、急にエンジンを起動させた事による強力なGが彼の身体を揺さぶる。今度は横方向の力だった。

「あの馬鹿!ちつとも乗りこなせてないじゃない!」

ゲイルローダーのコックピットの中で、ヴァルツが呆れ混じりの声をあげる。

彼女の言葉通り、ジュンハクの行動は馬鹿と罵られても仕方が無かった。

思わず、今まで死んでいった過去のパートナーの、その死に際の記憶が蘇る。

——死なせる訳にはいかない。私が守らないと。

と同時に、瞬時に脳裏を走り抜ける言葉の数々。それが行動に変わるまで数瞬の時間も要らなかった。

「落ち着きなさい、アストロハーツ少尉!機体の安定を保つ事に全力を集中するのよ!」

ヴァルツが呼び掛けるが、通信機の向こうからは叫び声しか返ってこない。

——このままではまずい。出鱈目な方向に進もうとしているジュンハク機。敵との遭遇まであとほんの僅か。

否。気が付けば、ジュンハクの視界は既に黒に染められていた。

「——ッ!？」

初めジュンハクはその黒を宇宙の黒であると認識していたが、すぐにそれが間違いだと気付いた。

それは異界の色。少なくともそれは、この宇宙に存在する色では

ない。何故か、ジューンハクはそう思った。

そしてその次の瞬間には、黒は実体を持ってこの宇宙に出現した。更に次の瞬間、その黒は顎を大きく開き、黒色の牙を剥いていた。何をしようとしているのかなど、考えるまでもない。

（く、喰われる——っ！）

ジューンハクは思わず目を瞑った。色々な感情が脳裏を駆け抜けていくが、ジューンハクにそれを捉える余地は無い。

それと同時に、ヴァルツはゲイルローダーを最高速度まで加速させた。

——死なせる訳にはいかない！

想いは行動に変わって、即座に彼女の身体を動かす。ジューンハク機と彼の目前に存在する敵との距離は無いに等しい。

この状態で敵を撃墜しようとするれば、ジューンハク機にも被害が及ぶだろう。それでも。

（やるしかない。私はもう、目の前で誰かが死ぬ所なんて見たくないのよ！）

それでもヴァルツは窮地のジューンハクを救う手段として、敵機の撃墜を選んだ。

どう足掻いても、一度道を外れてしまったゲイルローダーが正常に飛行出来るとは考えられない。

撃たなければ、また彼女は同じ事を繰り返すのだろう。ヴァルツの思考回路に流れ込む過去の映像。

どれも全て覚えている。忘れるものか。彼女は強く念じる。

操縦桿を握りなおす。己の腕を信じて、敵機のみを撃墜しようとする。

手が震えるのを無理矢理に押さえつけ、ターゲットをロックした。（お願い、当たって！）

少女の願いは、思わぬ形で実現する事となった。

「『あれ』はもう使えるのかね？」

巨大戦艦ファイネリオン内部の広大なスペースに、声が響き渡る。何度も何度も反響する声。

それもその筈、この空間には遮蔽物となる物体が存在していないのだ。ただのただっ広い空間に、人が立っている。

照明の類が全く配置されていない。宇宙の黒とはまた異質な、閉塞した色。

黒の空間に浮かぶ人影は、何処に居るとも知れぬ相手に対して問い掛ける。応答はすぐに返ってきた。

「システム自体は生きていますが、まだ実用段階には程遠いでしょうな」

その答えは予想の範囲内だったのか、暗闇を漂う人影はそうか、と一言だけ呟いた。

「しかし、いささか性急過ぎはしませんか。せめて『彼』の力を見極めてからでも遅くはないのでは」

問い掛けられた事に対して、暗闇の人影は、ははは！と甲高い笑い声をあげた。

声そのものは若い、というよりは幼い少年のものであったが、その声は何処か得体の知れない重圧が存在していた。

「確かに、私に与えられた時間は無限だ。しかし、私以外の人間、人類には時間が無いのだよ。彼がこの宇宙に現れた時から、既にパンドラの箱は開かれている。ならば、一刻も早く希望を掴みたいとは思わんかね？」

同感です、と短く応えて、それから何処に居るとも知れぬ人物は暗闇から立ち去った。

暗闇に一人取り残された人影は大きく両腕を広げると、すぐさまその腕を縮めて黒の空間を抱き締める。

「私が待ち焦がれた千年。千年待つてようやく、この好機に恵まれたんだ。これを逃そうものならバチが当たる。

ああ、待ち遠しい。待ち遠しいなあ。『彼』の思い描いた宇宙とは、どんなもののかなあ！」

その言葉を最後に、何処へとも知れず、人影は消え去った。

（生き、てる？）

自らの瞼が造り出した暗闇から抜け出したジュンハクは、周囲の様子を探る。

直前の記憶によれば確か、自分の目の前には正体不明の黒い敵が迫ってきていて、攻撃を受けようとしていた筈だ。

そこで直感的に、自分を助けてくれたのはヴァルツなのだ、と感づいた。無線機の向こうに居る彼女に話し掛ける。

「ヴァ……、中尉！すまん、助かった！」

『……私じゃないわ』

「へ？」

予想外の答えに、ジュンハクは気の抜けた声を零す。じゃあ、誰が、と考えようとした瞬間、通信機からまた声が聞こえた。

『ゲイルローダーの磁気センサーをよく見てみなさい』

磁気センサー？ジュンハクは言われるがままにモニターに目を移す。彼が目をまん丸にして驚いたのはその直後だった。

「な、なんだよこれっ！？」

磁気センサーからの情報を映し出す画面が、甲高いアラート音を全力で掻き鳴らし続けていた。

異常を察知したジュンハクは慌てて、センサーから溢れ出る情報をモニターに表示させた。

彼は、自分の機体に何のエラーが出ているのかなどといった情報を整理しなかった。

それよりももっと分かり易い変化が現れていたからである。

「……な、なんだよこの磁気嵐！濃度も範囲も滅茶苦茶じゃないか！」

モニターに表示されているのは、『DANGER』の文字。

ゲイルローダーに危険が迫っている事を知らせるメッセージだが、それよりもジュンハクは目の前の光景に驚いていた。

可視光線に変換された磁気嵐が、想像を遙かに上回る強力なそれに成り変わっていたのだ。

彼の目の前に展開される、強烈な磁気嵐。乱流と表現するべきか、濁流と表現するべきか、兎に角圧倒的なまでの存在感を誇る力。

その力が今彼らの居る戦闘エリア全体を覆い尽くし、あろう事がゲイルローダーそのものを飲み込もうとしている。

気が付けば、通信機は殆ど使い物にならなくなっていた。

辛うじてヴァルツとの通信は繋がっているようだが、他の隊との連絡は全く取れない状況にある。

エリアから敵機が消え失せた事も十分奇妙であるが、何より目の前に広がる磁気嵐が目下一番の珍事であるといえよう。

『落ち着きなさい。これはファイネリオンに搭載された兵器よ』

「兵器？」

『そう。ファイネリオンが特別なのは知ってるでしょ。艦内部には軍事施設だけでなく民間人の居住ブロックまで存在する。

それらの設備を稼働させるには、膨大な量の電力が必要な。当然、発電機からは強烈な電磁場が形成される。

今のは、その電磁場を収束し指向性を高める事によって敵機を迎撃する為の兵器だったのよ』

彼女は自分の言葉を頭の中で分かり易く補足する。この電磁場は敵に対するバリアのような物なのだ。

更にこのバリアは、最大でファイネリオンの周囲約八十キロ圏内をすっぽりと覆い尽くす程にまで拡張する事が出来る。

その際にはゲイルローダーに被害が及ばないよう、機体自体がセイフティモードに入り電磁波を遮断する。

今回は広範囲をカバーする為ではなく、敵の迎撃という攻撃的な目的で使用されたようだ。

「……そ、そんな物があつたのか」

『本当に何も知らなかったの？ 呆れた。それでよく軍学校を卒業出来たわね』

そこまで考え終わってからヴァルツは溜め息混じりに、本当に呆れた様子で言った。

明らかに人を馬鹿にした言葉。普段のジュンハクであれば即座に反撃している所なのだろうが……。

「……そんな」

だが、今の彼にそんな余裕は無かった。操縦桿を握っていた手から力が抜け、中途半端に宙に放り出される。

『ちよつと、どうしたのよ?』

(この艦を、守ってるのは、この艦、なんだよ)

ジュンハクは唐突に理解した。レヴ・ロミナスの言っていた事は事実だった。守るべきものに守られている矛盾。

「……俺が守るって決めたのに……!」

ジュンハクはその矛盾が悔しかった。それは何かを『守る』という強い使命感を持つ故の感情。

守りたかったものを守れなかった、と表現すれば、虚無感や無力感に少しだけ似ている。

『何を言っているのか分からないんだけど、とりあえずモニター見なさいよ。帰艦命令が出ているわ』

言われて初めて、ジュンハクはモニターに表示された文章を見つける。画面には『RETURN』とあった。

『ぐずぐずしていると置いて行かれるわよ。星間航行中でないといえ、ファイネリオンはとんでもないスピードが出るんだから』

「……、」

ジュンハクからの返事は無い。その理由がいまいち理解出来なかったヴァルツは、コンソールをかたかたと叩く。

途端、ジュンハク機がパイロットの意志とは関係無しに運動を始めた。

機首をほぼ半回転させたかと思うと、そのままの方向へスラスターを噴かす。

『オートパイロットモードにしたわ。とりあえず、悩みがあるなら

艦に戻ってから悩みなさいよね』

二機で一つのチームを編成するゲイルローダーには、そんな機能も備わっている。

チームでの戦闘が醍醐味であり優先事項であるゲイルローダー。

当然、片方の機体がトラブルを起こしたりパイロットに異変が訪れた場合その戦闘能力は半分以上にまで低下する。

そんな場合は一度ファイネリオンに帰艦する事が最優先ではあるのだが、その途中敵の追撃を受けないとは限らない。

従って、片方の機体が戦闘を行う時は、もう一方の機体が無事な回路を使用してサポートを行う、という戦法が可能だ。

今回で言うならば、沈黙状態に陥ったジュンハクを、パイロットに何らかの異変が起きた、というケースに当てはめている。

ともあれ、ジュンハクは己の内の苦悩を抱えたまま、本来とは違う意味での無言の帰還を行う事となった。

第二章 5

5

「ようつ、生意気なガキ。初めての遊園地はどうだったよ？なんか面白いアトラクションはあったか？ん？」

ゲイルローダーを降りるなり、そこにはレヴロミナスの姿があった。

ここはゲイルローダーの格納庫だ。金属の箱の中に、レヴの音が反響する。

どうやらここでジュンハクの帰艦を待っていたらしい。にやついた表情に、へらへらとした口調。

全部をひっくり返して反吐が出そうな状況であったが、生憎ジュンハクにその余力は残っていなかった。

彼は仕方無く、レヴの存在を無視して通り過ぎる事にする。

「ありや。どうした、お化け屋敷にでも間違えて入っちゃったのか？」

しかしレヴはジュンハクが取り合わないのも気にせず、ジュンハクの後を追いつつ一方的に言葉を投げ掛け続ける。

ジュンハクはずつと俯いたまま。そのまま格納庫の外へと出ようとした時、先程までとは少しトーンの違う声が聞こえた。

「守ろうなんて考えんじゃねえぞ」

その声が余りにも特徴的だったからだろうか、ジュンハクはその言葉で足を止める。レヴの話は続く。

「お前が守ろうとしてる物はまやかした。後で気付いたんじゃ遅いから、今の内に言っておいてやる。悪い事は言わねえから、パイロットなんてさっさと辞めちまえ」

「……、」

この忠告に対しても、ジュンハクは何も応えなかった。背後で、自動ドアの閉まる音。

「私からも言わせて貰うわ。早くゲイルローダーから降りなさい」
扉を閉める事で音声を遮断しようとしたジュンハクであったが、その行動は無駄に終わった。

俯いていた顔を上げ、目の前の人物に焦点を合わせる。そこにはヘルメットだけを外したパイロットスーツ姿のヴァルツが居た。

彼女は壁にもたれかかりながら腕を組んで、鋭い目つきでジュンハクの顔を睨みつけている。

「何だ、聞いてたのかよ」

「あなたでは、この先の戦闘を生き残る事は出来ない。死にたくなければパイロットを辞める事ね」

ヴァルツの言葉に、ジュンハクは辛うじて反応出来るかどうかといった、僅かばかりの気力を手に入れる。

「俺の事なら心配は要らない。次の戦闘では必ず――」

「あなたの心配なんてしていないわ。ゲイルローダーとそこに搭載されるエネルギーと弾薬を無駄遣いしないで、と言ってるの。」

資源は有限なの。それに、あなたに次は無い」

ヴァルツの言葉の意味が理解できない程、ジュンハクは無知ではなかった。

しかし、彼はどうしてもその言葉に納得する事は出来なかった。

だから反論する。僅かばかりの気力を削って。

「次ならあるだろ。俺はまだ生きてる。敵が現れれば、俺にもまた『次』が」

「私の方からシュトリーペ隊長に連絡しておくわ。あなたは使い物にならない、ってね」

冷たく突き放して、ヴァルツはこの場から立ち去ろうとする。

その言葉と共に、ジュンハクは頭の螺子が弾け飛ぶ音を聞いた。

「……そうだろうな。死神と一緒に出撃してたんじゃあ、命が幾つ

あっても足りないもんなあ!!」

「ばちん!!」

ジューンハクの顔に、容赦の無い平手打ちが飛んだ。

破裂音が鼓膜を揺らし、三半規管を一時的に麻痺させ、彼の身体が大きく傾く。それらが衝撃の大きさを物語る。

冷静に考えてみれば、当たり前前の反撃だ。何故こんな醜い罵り合いになったのかくらい、誰にでも分かる。

そしてこの展開を回避する事だって、簡単に出来ただろう。頭の螺子が、正常に働いていたならば。

「……、」

彼女は、一言も語らなかった。何も語らないまま、まっすぐ後ろを振り向く。彼女は今度こそジューンハクの前から姿を消した。

何故何も語らなかったのか、何故顔すら見せずに立ち去ったのか。そんな事くらい。そんな事くらい。

「がん!!」

彼女が立ち去った後、ジューンハクは真横の壁を思い切り殴りつけた。拳の骨が軋み、激しい痛みを発する。

「最低だ、俺」

その痛みが偽物である事は分かっていた。本物の痛みは、きっと彼女の心が。

そう遠くない日のデジャヴを味わった。苦い。ただひたすらに、苦かった。

第二章 6

6

「ご苦労様。でもわざわざ報告しに来てくれなくても良かったのに」
戦闘終了の旨を伝える為、ジュンハクはパイロットの第二詰め所にやってきていた。

彼のすぐ目の前には、軍服を正しく着こなした、ジュンハクよりも三つ四つ程年上の少女。

すらりと伸びた背が印象的な彼女は、今日赴任したばかりの機動兵器隊長シュトリーペロナだった。

戦闘結果についてはゲイルローダーから自動的にレポートが送信される仕組みになっている。

なので、本来ならばジュンハクはここ第二詰め所に立ち寄る必要が無かったのだが……。

彼女はジュンハクに真っ直ぐ向き合って、彼の目を真っ直ぐに捉えてジュンハクに問い掛ける。

「……と、どうやらそれだけではないみたいね。何なら、あなたの悩み事を言い当ててみましょうか？」

年上の女性だからなのだろうか、悪戯っぽく笑ってみせるシュトリーペ。

よしてくれ、というニュアンスのジェスチャーを行って、ジュンハクはそれを跳ね除ける。

「じゃあ、あなたの口から直接聞かせてもらいましょうか。何があったの？」

彼女の問い掛けに、ジュンハクはすぐには反応できなかった。暫く押し黙った後、溜まっていた言葉を吐き出す。

「俺、最低な事言っちゃった」

誰に、とは問わなくても、シュトリーペには予想が付いていた。
「何て言ったの？」

この疑問に、またジュンハクは黙り込む。その沈黙には詰め所の受付である女性も耳をそばだてていた。

やがて意を決したように、ジュンハクは言い放つ。

「死神と一緒に出撃したら命が足りない、って、……言ったんだ」
台詞を言い終えると同時、ジュンハクは拳を硬く締めた。怒りの矛先は、自分に向いている。

そうしなければ、自分にはこんな相談をする資格は無い。そう判断したからだ。

ジュンハクの言葉に対して、シュトリーペはわざとらしく、あからさまな溜め息をついた。

「ヴァルツが怒るのは当然ね」

「だけど、俺は」

「言い訳なんて通用しないわよ。あなたも一人の人間なら、自分の言葉には必ず責任を持つ事。つい口走った事だとか、心にも無い事だとか、そういう言葉で誤魔化せるなら人間苦労しないわ」

シュトリーペの言っている事は真理だった。ヒトが言葉を用いる以上、それは仕方の無い事だ。

ジュンハクはその言葉をしっかりと受け止める。受け止めた上で、次のステップに進んだ。

「違うんだ。俺はただ、あいつに謝りたいだけなんだ」

「だったら謝れば良いじゃない」

「……なんて言えば良いのかわからない」

「何を言えば良いのか、それを考えるのがあなたの義務よ」

シュトリーペはあくまで、ジュンハクが自ら答えに辿り着く事を促そうとしている。

元より覚悟をしていた筈のジュンハクだったが、彼はここでもう一度黙り込んでしまう。

シュトリーペは再び分かり易い溜め息をついて言う。

「それに、謝って許して貰えるとは限らないわよ。その場合、あなたの行いは只の自己満足にしかない。それだけに止まらず、余計に彼女の事を傷つける可能性だってある」

ジュンハクは理想的な、それ故に完全とは言い難い解答を示した。「もう傷付けない。今度は絶対に」

余りにも真つ直ぐなジュンハクの言葉に、シュトリーペは目を丸くする事しか出来なかった。

「……あはははは！」

暫くの沈黙を挟んでから、シュトリーペは周りの目も気にせず笑い転げ始めた。

ジュンハクはむすつとした表情になって文句を垂れる。

「……笑うなよな、人が真面目な話してんのに」

「ご、ごめんなさい！そういう意味じゃないのよ！ただ、細かい所があの人に似てるんだなあ、って」

あの人？そういうえば昨日も同じような台詞を聞いたが、それが何を指しているのかジュンハクには分からなかった。

「……ふふ。本当は黙っておこうと思ったんだけど、そういう事なら話しても良いかしらね」

「え？」

シュトリーペはまた悪戯っぽく笑うと、意表を突かれたジュンハクの顔を真つ直ぐに見据えて言う。

「さっきの戦闘の後、ヴァルツ中尉が私の所に来たの。あなたの事で話がある、って。彼女、何を言ったと思う？」

その問いへの正解を、ジュンハクは思いつく事が出来なかった。答えを求めて、ジュンハクは問う。

「……なんて言ったんだ？」

「『アストロハーツ少尉に謝らなければいけない』ってね」

「……え？」

意表を突かれ、更に予想外の解答を提示されて、ジュンハクの中の時間が止まる。

——ヴァルツが俺に謝りたい？ ジュンハクは訳が分からなくなつた。謝るのは自分の方だ、とばかり思っていたからだ。

ぽかんとした表情のままただ突っ立っているジュンハクの、その反応を楽しみながらシュトリーペは言う。

「『パートナーに対して酷い事を言ってしまった。何か良い言葉は無いか』と言っていたわ。『あなたを死なせたくない』ともね」

何を言っているのだろうか。暴言を吐いたのはジュンハクの方だ。ジュンハクは、目の前の少女の言葉の意味を取り違えたのではないか、と自分の記憶を探る。

思わずシュトリーペを凝視してしまうジュンハク。彼女は一瞬だけその視線に顔を引きつらせた後で彼に語り掛ける。

「もう傷付けない。その意思があなたにあつて、その思いが本物だと信じるなら、取るべき行動は一つ。そう思わない？」

「……ありがとう隊長！俺、今からヴァルツの所に行くてくる！」
それだけ告げると、ジュンハクはすぐさま詰め所の出口へ向かつて駆け出した。

受付の女性が声を上げて彼の行動に驚いた事も気に留めず、ジュンハクは一直線に走り始めた。

「ふふ。本当に、あの人そっくりだわ、あの子」

何か懐かしいものを見る目で、シュトリーペはその様子を見守っていた。

と、今まで傍観しているだけだった受付の女性がシュトリーペに話し掛ける。

「守秘義務違反ですよ、隊長。今の情報が重要機密だったら、軍法会議ものです」

と言った受付の女性の言葉は硬いが、表情は柔らかかった。どこか楽しげであるようにも感じられる。

シュトリーペはおっと、とでも言いたげに口元を隠すと、またにこやかな顔でジュンハクの向かった場所を見やる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0253w/>

銀河を巡る遥かのプラネテス

2011年10月12日07時07分発行